

異界の中の母なるものへの憧れ(下)

——鏡花にとっての『高野聖』と『八犬伝』、そして白山信仰——

松原 秀江*

要旨

『高野聖』の女主人公に、母・すゞは勿論、摩耶夫人・『八犬伝』の伏姫・白山の白山比咩、山姥そして一葉の重なることを見、白山信仰に無縁ではない能と深くかわる鏡花の代表作『高野聖』について論じた。

キーワード…すゞ、高野聖、南総里見八犬伝、鎗木清方、摩耶夫人、嬬山姥、河鍋曉斎、白山比咩、歌麿の母と子、化鳥、歌行燈、

樋口一葉、石徹白、柳田国男

七

『帝国文学』(明28・8)の、

泉鏡花氏は所謂新進、鋭の作家なり。昨は紅葉門下の一な、にがし、今は歴々の少壮作者、

といった言葉を引くまでもなく、明治二十七年十一月、『義血俠血』では紅葉の添作を経、「なにがし」と署名するしかなかった鏡花は、『夜行巡査』(明28・4)・『外科室』(同・6)を、創刊間もない『文芸倶楽部』(博文館)に載せて絶讃され、それらは新たに「観念小説」と呼ばれて、新進作家と認められたのだった。そして明治三十三年(一九〇〇)年二月、『高野聖』を出し、それは「独自の浪漫的詩境を見出した」傑作の一つとして、「高く評価され」、明治三十年代前半の鏡花の時代を、不動のものにしただけでなく、鷗外が『灰燼』(明44・10)・大1・12)の中で、

今丁度第一の詩人と云はれる時代が来てゐる

と記した評価を、決定的にしている。⁽²⁾

その『高野聖』と前回既に見た『身延の鷺』(大11・1)・3)には、奇妙な類似点がある。それを記せば、先ず作品の「構造」が、『身延の鷺』では二つの「入れ子型」であるのに対して、『高野聖』も同じ「入れ子型」で、こちらは三つの「構造」になっ⁽⁴⁾ている。そして女主人公は共に山中に居る。お澤は身延の山中に、『高野聖』の「婦人」は飛驒の山中に。又お澤は主人公・慶吉の従姉で、姉のような存在だが、老爺(親仁)に「嬢様」と呼ばれる「婦人」も、旅の僧がその咄の聞き手であるこの作品の語り手に、山中で共に沐浴した際の二人の様子を、

姉弟が内端話をするような調子。

と伝えている。更に注目したいのは、お澤には「手巾売」の「怪しげな情夫」があり、その作品『身延の鷺』が、いささかいがわしい元雑誌記者と、手巾売の「旅の小商人」と共に、「丁と」した作家になることを誓う慶吉(鏡花がモデル)に見送られて、旅立つお澤(従

姉のふみがモデル)の姿を、「八戒、悟浄に守護」された「渡天竺の順禮の風情」にたとえて終っていることである。その「情夫」は、江戸時代から既に大変な人気で、子供の頃から、誰もが胸踊らせて読んだ『西遊記』のヒーロー・孫悟空ではない。ドジでパツとしない「八戒」や「悟浄」、その中でも同じように食いつめて、まだ余り売れず「なにがし」の名でごまかしている作家の慶吉を悩ました元雑誌記者を、ブタの「八戒」にたとえるなら、「情夫」は河童の「悟浄」、しかも岡に上がった河童は、足手まといにはなっても、ほとんど何の役にも立たないだろう。にもかかわらず、というよりもだからこそ、このイメージは、『高野聖』の旅の僧が出会う飛驒山中の婦人の夫につながっていく。「白痴」「白痴殿」(初版本には「白痴」などとも)、何度も繰り返されるその「御亭主」の様子を、詳細に記した箇所終りの部分を示せば、次のようである。即ち、

南瓜の帯ほどな異形な者(出臍、筆者注)を、片手でいじくりながら幽霊の手つきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくなれば暖簾を立てたように畳まれそうな、年紀がそれでいて二十二三、口をあぐりやった上唇で巻込めよう、鼻の低さ、出額。五分刈の伸びたのが前は鶏冠のごとくなくて、頸脚へ撥ねて耳に被った、啞か、白痴か、これから蛙になろうかとするような少年。

(十)

などと。

『高野聖』のやがて「宗門名誉の説教師」で、「大和尚」にもなる旅の僧は、お澤の「順禮(玄奘三蔵)の風情」にもつながるが、

神か、魔か

(十九)

などと語られるように、気に入らない男を畜生に変えて喰う「魔」でありながら、「神」のようでもある「婦人」と、動物めいた「幽霊」のような卑小な夫の組み合わせには、何度も繰り返される「白痴」「白痴」など、「白」の文字に込められた意味も含め、『西遊記』などにつながる何か特別な世界が、鏡花の心の奥(深層・無意識の世界)にあり、それがこの作品の主題のみならず、鏡花の作家精神にも、深くつながってゆくのではないかと思われる。

八

鏡花について語ろうとする時、注目されてきた「いろ扱ひ」（明34・1）に、次のような部分のあることに、先ず注目してみよう。即ち、あの然^さよう。八犬^{はつけん}伝は、父や母に聞いて筋丈^{はぢ}は、大抵存じて居りましたし、弓張^{ゆみはり}月、旬伝^{しゅんでん}実記などをよんだ時、馬琴が大変ひきだつた。処^{ところ}が、追々ねツつりが厭^{いや}になったんです。けれども是は批評をするのだと、馬琴大人^{うしじん}に甚だ以て相済ぬ、唯ね、どうもネ。彼の人は意地の悪いネジケた爺さんのようだからさ。作のよしあしは別として好き、きらい、最^も屑^{くせ}、不最^{ふも}屑^{くせ}はかまわないでしよう。（この部分の傍点は原文通り。―線筆者）

などと。この部分は、「西鶴も最^も屑^{くせ}でない、最^も屑^{くせ}なのは京伝と三馬、種彦なぞです。」と続き、「何遍読んでも飽きないと云えば」、「膝栗毛（後述）です。それから種彦のものが大好きだった。」と云い、終りの部分は、

ええ、このごろでも草双紙は楽しみにして居ります。（この部分の傍点、他の部分同様筆者）

と、次のように続いている。

それに京伝本^{きやうでんほん}なぞも、父や母のことで懐^{なつ}しい記念が多^{おほ}うございますから、淋^{さび}しい時は枕許^{まくらご}に置^おきますとね、若菜姫^{わかしめ}なんぞ、アノ画^えの通り^{とおり}の姿^{すがた}で蜘蛛^{くまじ}の術^{じゆつ}をつかうのが幻^{まぼろし}に見^みえますよ。演劇^{えんげき}を見て居るより余ッ程^{よほほど}いい、笑^{わら}っちゃいけません、

などと。この文の出た明治三十四（一九〇二）年は、『高野聖』発表の次の年、鏡花二十八歳（数えて二十九歳）、五十年又は六十年が人生^{じんせい}だった当時（鏡花は満六十六歳で亡くなっている）、既に「新進気鋭の作家」として、ゆるぎない地位を得、「三十にして立つ」と云われた時代のその三十にもなろうとする男^{おとこ}が、「淋^{さび}しい時」には、「父や母の懐^{なつ}しい記念」につながる「草双紙」を「枕許^{まくらご}」に置いて寝^ねその「画^えの通りの姿^{すがた}」を「幻^{まぼろし}に見^み」ていたと云うなら、「大変^{たいへん}ひいきだった」「時」もある馬琴^{ばきん}の作品の中でも、

『八犬^{はつけん}伝』が馬琴か、馬琴が『八犬^{はつけん}伝』か

と云われる程^{ほど}の「馬琴」の代表作の『八犬^{はつけん}伝』を、忘れてしまうことなどあったろうか。まだ「三歳四歳」の頃、草双紙の「表紙の美

しい繪」だけでは満足せず、「裁縫」中の母・すぐにも、「其理解」をせがんだ（いろ扱ひ）幼い鏡花（鏡太郎）は、終生誇にしたその「父や母」が語って聞かせてくれたこの作品の世界を、心躍せて「聞い」たに違いない。そして心の奥底に、宝物のようにしまひ込んで、終生忘れることなどなかったろう（鏡花は『八犬伝』のダイジェスト版、『仮名読八犬伝』『八犬伝犬の草紙』も所蔵している）。

円地文子は、「小説好きなどでない」「平凡な家庭の主婦」なのに、子育ての頃にも『八犬伝』を「読み出すと面白くてたまらず、行燈の芯をかきたてて、読み耽った」（當時は音読、従って子供も聞いていたという「明治十年代」の「雪深い山形あたりの古い家」の母方の祖母や、「四、五歳のときから（父方の）祖母に玉梓から八房伏姫の段を全部話されて」、「馬琴を故郷」にして育ち、その「一番最初の出会い」だった『八犬伝』の「サワリ」の文章は大てい暗記して、「幼女の」「精神に、一つの核をつくり、「今（昭和五十三年）でもつるつる口に出て来る」自分自身について語っている。鏡花が憧れライバル視した一葉（後述）も、『八犬伝』を暗誦する程よく読んでいたこと、鷗外が弟の篤次郎と共に、馬琴の明治期の後刷本のほとんどを、買い求めて所蔵していたことなど、改めて云うまでもない。

にもかかわらず鏡花が馬琴について、

追々ねッ、つりが厭になったんです。

と云うのは、「高潔枯淡な人格と、洒脱で飾り気のない人柄で」「慕われ」、「現在の宝生会の母体」を作った伯父の松本金太郎に「私淑」⁽⁸⁾し、時には気取らない「武骨な」「九州男児のやうな風采」で弟子の前に現れ、徹頭徹尾「親分」肌（「紅葉先生」「明星」卯歳第十一号、明36・11）の「勝気の江戸ッ子」（「紅葉山人追憶録」「新小説」第八年第十三卷、明36・12）だった師の紅葉を、尊敬する余りの言葉だったろうか。というのもその紅葉が、佐佐木信綱に「日本三大作家として、紫式部、西鶴、馬琴をあげ」⁽⁹⁾ているからである。

作品そのものの「着想」とは違い、「教へること」の出来る「文章のことはやかましく言つて」、

七生生れ変つて文章の為に尽す……

と云つて亡くなつた紅葉（同上）が、たとえば『八犬伝』について、「確かな骨格を持」ただけでなく、

文章を中心とした「読本」という媒体で語られているため、何よりも文体がその魅力を読者に伝える上で大きな働きをしている。と云われるその馬琴の作品を、よく読むように弟子達にも勧めていなかったなどとは思えない⁽¹⁰⁾。円地文子も指摘するように、紅葉晩年⁽¹¹⁾

の野心的な代表作『金色夜叉』(明30・1・35・5)には、貫一から離れてゆく宮の心を、貫一が『八犬伝』の信乃に対する浜路の命がけの「情愛」に比べて、嘆く場面がある(前編第六章)。

鏡花の『身延の鶯』の姉妹篇とも云える『新通夜物語』(大6・4)を、再度見てみよう。その(七)には、

……その時分はね、拙者武術の嗜があった。没羽箭と號して礫を飛ばし、毛野胤智と名告つて居合ひを抜いたもの。

と記す部分がある。「拙者」は菅原松吉(鏡花がモデル)、「毛野胤智」は謀られて殺された親の仇討ちの為、女装して女田楽一座の日開野と名乗り、敵(馬加大記)に近づき、対牛楼でその一家を皆殺しにした犬坂毛野、智勇に秀でた八犬士の一人である。鏡花は幼い頃、「草雙子の餓鬼大將」で、「百萬石の城下丈けあつて棒を腰に横へ太刀に擬し、大道をエヘンエヘン威張つて歩いた」り、「紙をしごいた采配を振つて勝を得た」と、述べている(「わんぱく物語」明43・5)。そんな「小兒の頃」⁽³⁾、華やかで美しい犬士にわが身をなぞらえて、遊ぶことがあつたとしても、何ら不思議ではない。この作品では既に見たように、「七ツか八ツ」の頃に「家」が「退轉」(父親の鼓打・孫惣が亡くなるのは、お組のモデル・ふみが十歳の時。ふみは『身延の鶯』では、既に見たように、「八戒、淨に守護」される「順禮の風情」のお澤になっている)、芸者に出て、龍野の温泉の鍛冶屋の近蔵と、二十そこそこで「夫婦」になり、「いざこざ」が絶えなかつた頃、母とも姉とも慕う松吉に、そのお組が「安倍川」を食べさせ、「蜜柑を剥いて」、

あんとおしよ

と云っている所に、その「近蔵め」が怒鳴り込んで、「鐵棒ぐらゐの鐵の火箸を逆手に取つて」、

小僧覺悟しろ

とくれば、「十四の小兒」の松吉は、まるで親の仇でも打つように、「生命がけ」になつたと云うのである。

眞個の姉妹に成らうねえ。

とお組が松吉に云う時の漢字が、「姉妹」になつているのも、毛野が女装して、女田楽一座で日開野と名乗っていたことを暗示する、心にくいばかりの鏡花の配慮・しかけだつたらうか。

更に『黒猫』(明28・6・2・7・23)を見てみよう。この作品は、ポーの『ブラックキャット』を「自家薬籠中のもの」としたか、⁽¹²⁾

図1



異界の中の母なるものへの憧れ

と云われている。それはそれとして、「盲人小説」の「源」といわれる「富の市風の盲人の執念」(後述)は、紅葉の『心の闇』(明26・6・7)に「原型」があると指摘されるこの作品の、次の部分を見逃す訳にはいかないだろう。主人公・お小夜が、「一方ならず」黒猫を「寵愛」することについて、「人には奇妙なる好悪のあるものにて」と記し、それも「止むべからざる癖にやありけん」と云いながら、次のように述べているからである。

とは謂え、伏姫の物語を知れる、年長の婦人の考にてはある点においてその秀麗なる女のために、いささか古猫を忌む処無きにあらず。他はいかなることにても、我に肯かざるなきお小夜嬢のこの事のみは肯入れざるも、母の懸念の一つにて、折に触れては論す事の、言効なしとは知りながら、その日は談話の行懸なり、少し根深く教えてむと、母夫人はなお何か謂わむと欲し、屹となりて向直れり。

と。「伏姫の物語」は、云わずと知れた馬琴の『南総里見八犬伝』。「旧藩主に事えて千石を領し」た「士族」の娘で、「時に十七歳、玉の顔、雪の膚、類稀な」「美人」で、弟の秀松には「常に情」の深い「姉様」、「高等な」「教育」も受け、「思想も見識も備え」たその「高尚な」「女性」のお小夜が、「ふとつて」「まるで小犬の様な黒猫を、「寵愛」するというのなら、当時の女性同様、恐らく『八犬伝』を愛読し、(肇輯卷之五第十回の)挿絵(図1)も見ていたに違いないその母親には、娘の姿が犬の八房を可愛がったことで、犬と共に山中に隠れ、母親を嘆かせただけでなく、誤って許婚の弾丸

に当って、悲劇的な最期を迎え、八犬士の物語の発端になる伏姫に重なったとして、何ら不思議ではないだろう。

お小夜には（お組やお澤同様）、既に父親はない。だが、伏姫は改めて云うまでもなく、安房国の城主・里見義実の娘。彼女には常に彼女を敬愛してやまない弟・義成がいる。のみならずお小夜同様、「心ざま」は「いと伶俐し」く、「和漢の書」を「よく讀」、「孝貞忠怒」の「おのづから」備った「世に儔」まれな、「月も花も、及ばぬ」「玉」のように美しい姫君だった。義実が「禮讓恩義」も弁えない安西景連に裏切られて攻められ、あわや落城に及ばんとした時、戯れに云った「虚言を實事」にして、八房が景連の首を喰わえて帰ったことで、馬琴が二十八年もの歳月をかけた、この全九輯百六冊もの壮大な物語は展開する。

九

ところで今、この父親（義実）と娘（伏姫）に改めて注目するなら、この二人の招いた悲劇は『高野聖』の父親（医者）と娘（孤家の女）につながってゆく。

鏡花は「創作苦心談」（明34・3）で、『高野聖』は、「大學生」と共に「富山から飛驒の山奥へ這入った」友人の話を聞いて、できたものだと云っている。「飛驒の山中」は「随分ひどい所」で、「疲れて汗をかいた」その友人（商人）が、宿の「裏の谷川へ出た折」、偶々「出喰はした」「美しい田舎娘」が、この作品のモデルだった。「想像を加へて」「書くのに随分困」り、

「何處か氣高い所を見せなければ感興をぶちこはしてしま」うので、「通常の田舎娘とか、世話女房とかにする」わけにはいかず、
「あ、云う具合にやつた」

と云うなら、その「奥ゆかしい、上品な、高家」風の「深山の孤家」の女の後ろには、「富山」の連想から、伏姫がいたのではなからうか。鏡花憧れの「大學生」のように、「和漢の書」を「よく讀」、「非道」な景連を嫌って、かけがえのない父親・義実、「君子」としての「一言」を守らせるため、これも「脱れぬ業因」「命運の致す所」と八房に従い、八房の「留る所こそわが死どころ」と、共に富山の山奥に去ってゆく伏姫は、法華経を信じ、言葉や文字をこの上なく大事にした鏡花にとって、たまらない魅力の持主だったら

う。『高野聖』の飛驒山中の女の「亭主」が、既に見たように、「年紀」は「二十三」でも、「口をあんぐり」あけ、「五分刈」の髪は、伸びて「鶏冠」のようで、

・言葉をかけたが少しも通ぜず、

・啞か、白痴か、これから蛙になろうとするような少年

なら、それは人間というより、犬猫同然、八房や黒猫につながってゆく。

前田愛は、

疾病・傷痕と医療・薬剤とは「八犬伝」がくりかえしとりあげているモチーフのひとつだ

と指摘し、馬琴は「人倫と秩序の象徴として医療・薬剤のモチーフを援用」し、「逆に疾病・傷痕は自然と無秩序とに結びつけられる」と云うが、足腰の立たないこの男は以前、医者だった女の父親の患者だった。「見得坊で傲慢」なその「藪医者」の「治療」の失敗で、当時六歳の「伶俐」で「聞分」のある「子供」だったこの男は、「目もあてられぬ不具」になり、「あまり」の「不便さに抱いて、寝てやった」娘の手を離れず、「因果と断念め」た「親兄の心をなだめるため」にも、父親は娘を、「孤家」のその子の「家」まで、送らせたのである。そして娘も「ついほだされて逗留した五日目から大雨が降出し」、「たちまち泥海」になつて、「その時村から供をした」親仁は、

この洪水で生残ったのは、不思議にも娘と小児とそれに（中略）この親仁ばかりと云っている。しかも、

同一水で医者^{おなじ}の内も死絶えた

のなら、

どうしてあれほど美しく育ったものだろう

と不思議がられたこの女は又、人の道も弁えぬ安西景連に、突如として攻め込まれ、あわや落城に及んだ時、父・義実の失言をその身に背負い、八房と共に富山の山中に隠れ住んだ、「孝・貞・忠・恕」の絶世の美女・伏姫に繋がるだろう。伏姫には、幼少時「二郎太郎」と呼ばれた弟・義成がいる。この女も「少年」のような「亭主」を、「次郎さん」と呼んでいる。のみならず八房と暮した伏姫が、身の

潔白を証明しようとしたように、「少年」のような男を「亭主」にするこの女も、親仁ばかりか旅の僧にも、「嬢様」と云われている。そしてその内実を示すように、

・声も清しい、ものやさしい。

・目たたきもしない清しい目で私（旅の僧）の顔をつくづく見た。

などと繰り返し記され、共に「谷川」で水浴しながら、「川へ落こちたら」「村里の者が何といって見ましようね」と問われて、旅の僧が、白桃の花だと思っています。

と答えるや、

さも嬉しそうに莞爾してその時だけは初々しゅう年紀も七ツ八ツ若やぐばかり、処女の羞を含んで下を向いた。と語られている。

更に又、伏姫が神通力をもった伏姫神として活躍するように、「孤家」の女も「神通自在」の力をもっている。そしてその力を発揮する時の目的は、一見全く別のようだがしかし、伏姫は戦う八犬士の危機に、「救いの手を差し伸べる」為に、即ち悪人を滅す為に、「孤家」の女は、彼女に云い寄る醜い男どもをもて遊んで、飽いたら「畜生」に変え、「生命を取」ってしまう為に。

更に又、最近刊行された注目に価する書、『八犬伝錦絵大全―国芳三代豊国 芳年 描く江戸のヒーロー』⁽¹⁵⁾の中の、

146 一水野年方一富山の奥に伏姫神童に遇ふ圖―大判錦絵3枚続（30頁図2）

を見てみよう。この錦絵について、次のように記されている。即ち、

富山の洞窟で八房と暮らしていた伏姫に、草刈りの童が物類相感の理によって伏姫が懐妊したことを告げる。この場面を描いた錦絵としては、役者絵より遅い時期のものもあるが、物語絵としては最も遅い時期の作品である。

と。絵葉書の人気に押されて、鏡花もよくのぞいた絵草子屋が消えてゆくのは、日露戦争以降のようだが、この錦絵の出たのは明治十九（一八八六）年四月。この年方の絵（図2）⁽¹⁵⁾と、明治四十一年（一九〇八）年二月刊の『高野聖』の、鐫木清方が手がけた口絵（30頁図3）⁽¹⁶⁾を比較してみよう。清方は水野年方に入門し、「浮世絵の伝統に沿って清新の画風を示した」画家である。「父は明治前期の小説家、条

野採菊」

自叙伝『こしかたの記』『続こしかたの記』で語るかれの生涯は、明治・大正期の文学的世界と、ふかい交渉をもった新しい風俗画につながっていた。⁽¹⁷⁾

と云われている。⁽¹⁷⁾ しかもその上その清方が、「じり／＼する程憧れ」て待った鏡花（二十九歳）自らが、明治三十五年「書き下ろしの『三枚続』を紫縮緬の帛紗に包んで」、春陽堂から「口絵と装幀」を頼まれていた「新進の挿絵画家」・清方（二十四歳）を訪ねて以来、二人は「勿頸の友」だった。⁽¹⁸⁾ のみならず「小説」の「書きたかった」（後述）清方には、馬琴その人を描いた絵がある。一人息子・宗伯の死後目を悪くし、時には字を知らない妻・お百の嫉妬にも堪えながら、医者娘が当時の女として漢字は知らず、泣き出すこともあった嫁のお路に、一字一字教えて代筆させ、行燈の下で夜遅くまで、お百の悔しさも知りながら家計を支える為にも、ひたすら『八犬伝』の完成に向って努力し続ける馬琴の姿を描いた絵が。今もロングセラーの新潮古典文学アルバム『滝沢馬琴』のカバー絵にもなっているこの馬琴の姿は、見る者に深い感動を与えずにはいない。そんな絵を描いている清方が、鏡花作品『葛飾砂子』明33・11の口絵も手がけた師匠の、しかも『八犬伝』九輯百六冊ものそもその要にもなるような場面の錦絵（図2）を、見なかっただろうか。又鏡花の『高野聖』執筆の手の内（後述）を、見ぬけなかっただろうか。清方の『高野聖』の口絵（図3）は、年方の『八犬伝』の錦絵（図2）を手本に、換骨奪胎したものである。

年方の三枚続の錦絵の向って左側一枚分（木陰で様子を伺う男は、八房を殺すつもり、伏姫の許婚・大輔だろうか）の場面と、それに続く「紅葉の木」のすべてを除き、「洞窟」の位置を左にずらして、藁葺きの「孤家」^{ひとつや}にし、「八房」を「白痴」の「子供」に変え、「草刈りの童」の乗った「牛」を、「童」とその腰の下敷物を除いて、裸の「馬」にし、「伏姫」の姿態は少し崩して、体の向きを変え、ほぼ中央に据る。そしてあらたに加えた「親仁」は、その「婦人」^{おんな}の右下に坐らせ、「旅僧」を「孤家」^{ひとつや}の中の「子供」の左横に立たせて、全体を、

妖気を籠めて朦朧とした月あかり（後述）

の場面にすれば、清方の『高野聖』の口絵になる。「伏姫」がこの「嫁人」^{おんな}同様、しば／＼「月あかり」の中にいることも、つけ加え

異界の中の母なるものへの憧れ

図2



ておこう。

のみならずこの清方の口絵を、『八犬伝』そのもののこの場面、第二輯巻之一第十二回の挿絵（図4）¹³に、比べるならどうだろう。裏返して比較すれば、牛に乗る「神童」の背中を丸めた姿態は、清方の口絵（図3）の「婦人」の左下に蹲る「親仁」の姿によく似ている。「止水」に映る自らの「頭」^{かうべ}が「犬」だったり、体調の変化を訝る伏姫に、八房との「物類相感」による妊娠を伝えるこの「神童」を、伏姫が、役の行者の示現か

図3



と思っていること、そして又この童が自らの師を、普段は「人の病気を治療し」、「売卜をして生活」している、と伝えていることに注目すれば、藪医者の「村から」、「娘（婦人）

図 4



異界の中の母なるものへの憧れ

と小児^{こども}の「供をして」きただけでなく、その「婦人^{おんな}」を支え、「婦人^{おんな}」の正体を旅の僧に明かし、正気に戻すこの「親仁」は、「役の行者」にも相当する人物だったろうか。たとえば『日本国語大辞典』（小学館）の「藪医者」の項では、（ ）をつけて次のように記している。即ち、
「やぶ」は「野巫（やぶ）」で、本来は「呪術を医薬とともに用いる者」の意であつたという。それに「藪」「野夫」などの漢字をあてて、田舎医者^{いしや}の意となり、あざけつていったものかと。
そして「藪医者」を、「技術のへたな医者」と注している。

十

とすれば、「十三年前の大水の時」、「一面に野良」になった大きな「医者様の跡」の「藪」から、売薬の後を追って、「入った」ら「助」からないと云われた「旧道」に踏み込み、「恐しい魔処」のような飛驒^{ひでと}の山中に迷い込んで、「蛭の林の出口」にたどり着いた旅僧が、谷川に掛った「土橋」を越えて、この「孤家^{ひとりや}」にたどり着くことに注目してみよう。というのも大鼓師の娘だった最愛の母・すゞは勿論、「宝生九郎の信任厚く、その片腕的存在で」、「現在の宝生会の母体」を作ったと云われる松本金太郎を叔父にし、誇りにし続けた鏡花の愛した能の世界で、旅僧の存在は大きく、又その叔父に深くつながる能舞台の橋掛り⁽¹⁹⁾は、既に江

戸初期の絵巻にも描かれるように、欠かせないからだ。シテ(主役の役者)が、「橋掛りの奥の揚幕の背後から過去」や「異界的時空を背負って現れ」、ワキ(脇役の役者、旅の僧であることが多い)と言葉を交すや、「現実界の人間であるワキ(中略)のいる空間」が、「たちまちこの世ならぬ時空に一転」してしまふ、などと云われている。「幽霊の手つきで、片手を宙にぶらり」、

啞か、白痴か、これから蛙になろうとするような少年、

を夫とも知らず、宿を乞う僧に、けんもほろろな「婦人」の対応を、この僧が、

休めともいわずはじめから宿の常世は留守らしい、人を泊めないと極めたもののように見える。

と謡曲「鉢木」を思い浮かべて述懐するのも、この際参考になろう。もっとも『高野聖』の主役は旅の僧、「婦人」は脇役で、橋を渡るのも逆、能なら脇役の僧が渡っている。

だが、「橋掛りの奥の揚幕の背後から」現れる前に、

鏡の間で能面をつけた瞬間からシテの心は現実界から離れて能面的人格に移行している。能面の外の現実界とは異なる能面の内なる別世界、着けている能面の表わす心を心としてシテは存立している。

のなら、「土橋」を渡った瞬間から、旅の僧と「婦人」の立場(役割)は逆転する。能の世界(舞台)同様、「婦人」はシテ、旅の僧はワキ。そしてその場も、「現実界と異なる能面(シテ、婦人)の内なる別世界」、「異界や過去の次元」に引き込まれた「この世ならぬ時空に一転」してしまふ。

とすればこの「婦人」と「これから蛙になろうとするような少年」(この「蛙」は、「水死した男」と云われる能面「蛙(河津)」と無関係ではないだろう)の住む「別世界」は、伏姫が犬の八房と共に住む「富山」が富士山なら、「立山とともに」、日本の「三名山」「霊山」の「一つとしてながく信仰の山として崇められてきた」白山に、深くかわるのではなからうか。石川・福井・岐阜の三県にわたって、標高二七〇二メートルもの高さで聳え、「加賀の白山」と呼ばれるように、加賀から見た姿が「一番すぐれている」と云われる、この「一年の半分は白い」「気高く美しい」山を、金沢の自然をこよなく愛した鏡花が見なかつたなどとは思えない。何度もしっかり見ていた

(後述)。

夕方、日本海に沈む太陽の余映を受けて、白山が薔薇色に染まるひと時は、美しいものの究極であった。みるみるうちに薄鼠に暮れて行くまでの、暫くの間の微妙な色彩の推移は、この世のものとも思われなかった。

北陸の冬は晴れ間が少ない。たまに一点の雲もなく晴れた夜、大気がピンと響くように凍って、澄み渡った大空に、青い月光を受けて、白銀の白山がまるで水晶細工のように浮きあがっているさまは、何か非現実的な夢幻の国の景色であった。

と白山を「ふるさとの守護神」のように仰ぐ深田久弥は記すが、「孤高の気品をもつて」、観る者の心を打つ白山が、その「言葉」では言い尽せない「神々しさと清楚な美しさ」故に、「古来から神の住む霊山として畏怖と崇拜の対象ともなってきた」のなら、日蓮宗の「熱心な信心家」だった父・清次に連れられて、幼時には「物見遊山」よりも、「お寺詣り」の多かった「おばけずきはいはれ少々と処女作」明40・5）鏡花（鏡太郎）も、幼い頃から憧れと畏敬の念で、この山を仰ぎ見ただろう。

しかもその上、富山の伏姫神につながる富士山の祭神が、木花開耶姫であるように、「立山の雄頸な山勢の雄山神に対して、加賀白山の優美な山容」は、比咩（姫）神として「崇め」られてきたのなら、鏡花にとってこの山の「威あつてしかも優しい姿」は、先ず亡き母・すゞにつながったろう。すゞの埋葬された卯辰山が既に、「母」の在在としての「特別の意味」を持っていたのだから。

ここで改めて、

十歳ばかりの頃なりけん、加賀国石川郡、松任の駅より、畦路を半町ばかり小村に入込みたる片辺に、里寺あり、寺号は覺えず、摩耶夫人おはします。

と記す『一景話題』（明44・6）の中の「夫人堂」の一文を、思い起こしてみよう。「鏡花がおなかにいる時」、安産を願ってだろう、「詣でたという」その「なき母にあがれて、父とともに詣で」たこの日蓮宗の「里寺」は行善寺、松任（現在白山市）は、「手取川扇伏地の扇中央部に位置」し、日本海に面したこの地域からながめる白山は、既に見た深田久弥の記述に、ほぼ同じだったと思われる。「金沢帰郷の際には必ず詣でた」と云われる行善寺の、

跪ける幼きものには、すら／＼と丈高う、御髪の艶に星一つ晃々と輝くや、ふと差覗くかとして、拝まれたまひぬ。浮べる眉、画ける唇、したゝる露の御まなざし。瓔珞の珠の中にひとへに白き御胸を、来よとや幽に打寛ろげたまへる、気高く、優しく、かし

異界の中の母なるものへの憧れ

こくも妙に美しき御姿、何時も、まのあたりに見参らす。

と「夫人堂」に記す「摩耶夫人像」(図5)⁽²⁶⁾と、既に見た「八丈伝錦絵大全―国芳三代豊国芳年描く江戸のヒーロー」⁽¹⁵⁾の、

91 一歌川国芳一本朝水滸伝、剛勇八百人一個 犬江親兵衛仁、一判錦絵揃物

を比較してみよう。この図(図6)を裏返して、伏姫が左肩に抱き上げる親兵衛を、行善寺の「摩耶夫人像」(図5)の高く掲げる右腕にすれば、この二つの伏姫像と摩耶夫人像は、ほぼ重なってくる。「夫人堂」に記される右の文の傍点部分は、ほとんどそのまま伏姫に同じだと云っていい。亡き母につながる絵双紙(錦絵も含む)を愛し、『國字水滸傳』や『傾城水滸傳』・『稗史』水滸傳』も所蔵した鏡花には、実証不明ながら、

『水滸傳』やおそらくは『南総里見八丈伝』の、大掛かりな伝奇性の屋台骨に拠って立つところが少なくなかった。⁽³⁰⁾

と云われる伝奇的長編小説『風流線・続風流線』(明36・10・37・10)もあることを思えば、鏡花が91(図6)の錦絵を見ていた可能性は大きいと、云ってよいだろう。

十一

91 (図6) は、『南総里見八丈伝』第五輯卷之一第四十回の第三図(図7)⁽¹³⁾の一部、向って左上、祖母・妙真らと安房へ向う途中、悪船頭・蛇九郎らに襲われたわずか四歳の親兵衛を、自ら引き起こした雷鳴風雨の中、抱きかかえて救い取り、神隠しにする神霊・伏姫の姿を、独立させたものである。親兵衛を胸に抱く伏姫の乗っているのは、八丈士の父親にあたる八房の背中だろうか。富山の山中で九歳まで、伏姫神に養育されたこの母のない神童・親兵衛は、十歳(満九歳)で母・すゞを亡くし、祖母・きての慈愛の中で暮しながら、でも母上は、容いて下さいます。亡くなりました母は大層私を可愛がつて、ですから願つたら叶ひませう、と毎晩此処まで参りました。墓が向の山にございます。

と書かなければならなかった鏡花にとって、親兵衛も又、わが身を重ねるのに恰好の、物語の主人公(英雄)だったろう。母・すゞの

(『聲の一心』明28・1)

異界の中の母なるものへの憧れ



図 6



図 5

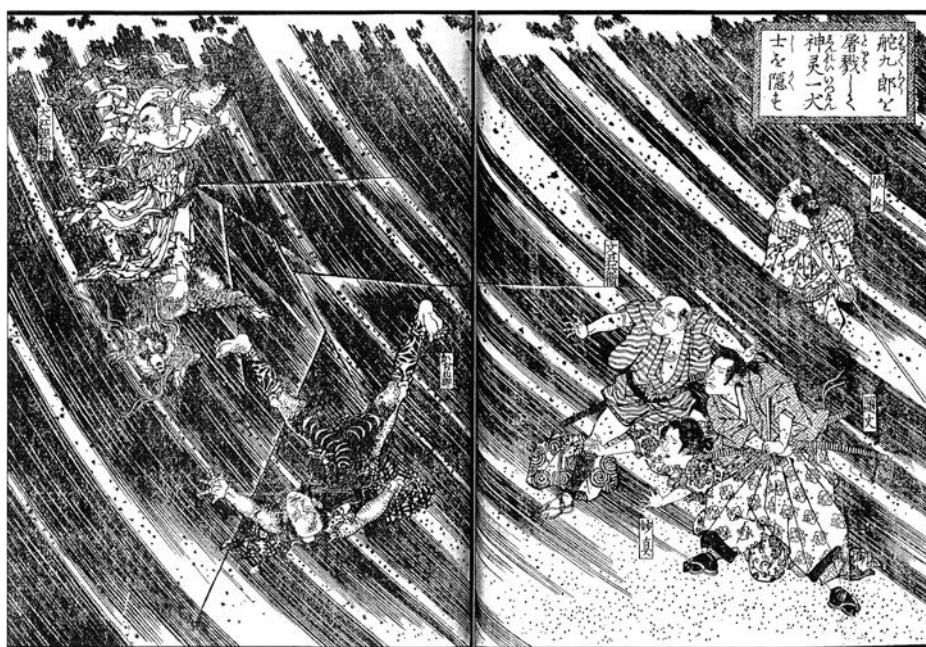


図 7

図 8



図 9



眠る卯辰山(善妙寺)に、行善寺とほぼ同形の摩耶夫人像(図8)⁽²⁶⁾

があるだけでなく、鏡花は胸に赤子の釈迦を抱く、善妙寺の摩耶夫人像にほぼ同じ形の、「高さ30センチ程の」夫人像(図9)⁽³²⁾

を、仏師に造らせ、「書斎の机の傍にいつも置いて」いた。⁽³¹⁾『清

心庵』(明30・7)でも鏡花は、「山中の孤家」(清心庵)で、「摩耶」

(摩耶夫人様とも)と云われる「若御新造」(華族様の御台様)と

一緒に居る「千ちゃん」(予)に、

・私はね、母様がお亡くななんすったって、それを承知は出

来ないんだ。

・どうしてもあきらめられない。

・摩耶さんと一所に居りや、母様のこと、何うにか堪忍が出来る

などと云わせている。「千ちゃん」がその「母様」に死なれた

(身投げされた)のは、「まだ九歳時分のこと」だった。

のみならず、百を超える兎のコレクションについて、養女の名月(弟・豊春の娘)が、

名月(弟・豊春の娘)が、

鏡花は四年でした。自分の干支から数えて七番目のものを

もつとその人のお守りになるのだそうで、鏡花のおかあさ

んが子供の鏡花に掌中にのる水晶の兎をもたせてくださった

たのが、鏡花と兎の親身のはじまりです

と述べていること、そしてその「掌中⁽³³⁾にのる水晶の兎」も、「書斎の文机や脇机の上など、執筆時の鏡花の身辺に置かれていた⁽²⁹⁾」ことを思えば、この「水晶の兎」は鏡花にとって、伏姫の死の直前、その身から飛び散り、八人の子即ち八犬士の誕生後、彼らを守護し続けた「靈玉」同様のものではなからうか。「八犬士の随一」親兵衛は、「仁」の玉を握って生まれてきた。

その親兵衛がその為に、「大八」と「綽名^{あだな}」される「疋弱^{かたわ}（大八車の片輪者）だったこと、更に又富山の洞窟で、伏姫神に養育されていたことに、注目してみよう。というのも「親兄」に離れ、「洪水」の後も「孤家^{ひとつや}」で「婦人^{おんな}」に守られ、「行届いた世話」のされている『高野聖』の「子供」が、「不具^{かたわ}」だからである。この「孤家」の「婦人」が、奥ゆかしい上品な、「高家風」の「都にも希な器量」で、「神通自在」の力をもっているのも、母・すゝや摩耶夫人にも重なる伏姫神につながるだろう。

だが、旅の僧を谷川に案内する時この女は、「墓^{ひま}」や「大蝙蝠^{おうちうふ}」・「小犬ほどの鼠色の小坊主」・「猿」など、得体の知れないものにまとい付かれ、

その悪戯^{いたづ}に多く機嫌を損ねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母様^{おふくろ}には得てある図じや。
本当に怒り出す。

などと記されているだけでない。谷川で水あびをして帰った二人を見て、根が付いたように立ちはだかる馬の「正面」に立った時、この女は、

愛嬌^{しな}も嬌態^{しな}も、世話らしい打解けた風は頓に失せて、神か、魔かと思われる。

とまで記されている。

ここで『特別展 河鍋曉斎の能・狂言画⁽³⁴⁾』の中の、
29 山姥^{やまば}図（39頁図10）

と、先に見た『八犬伝』第五輯卷之二第四十回の第三図（35頁図7）を、比較してみよう。この図を裏返して、親兵衛を抱き上げる伏姫と、金太郎（坂田金時）を抱きかかえる山姥を比べるなら、動物らも含め、乗せるかまといつくか、その数も異なるが、金太郎の姿態も少し変えればほぼ同じ構図になる。

暁斎は「能・狂言に造詣が深く、自ら狂言も演じ」、師の紅葉や伯父の(松本)金太郎同様、「典型的な江戸ッ子気質」で、鏡花と同じ日蓮宗。その「本質を把握」した雅俗一体の明治の「パイオニア」的な「幅広い画業」は、人間界やこの世に限らず、幕府崩壊と共に能・狂言も潰滅状態に陥っていた時、万亭・応賀が大衆化能楽「吾妻能狂言」の新曲を書き、『新開哇狂言』を出すと、「それらの表紙絵や挿絵を描い」ただけでない、「応賀と組んだ挿絵本など、本の挿絵」も「数多く描いている」。(35) 鏡花も所持した応賀の『釈迦八相倭文庫』が、『夫人利生記』(大13・7)や、鏡花が所持した摩耶夫人像(36頁図9)に深くかわること、しかもその鏡花に、「今様能狂言」とも吾妻能狂言とも泉祐(仙助)能ともいわれるもの」と同系統の、「紅葉狂言一座の女役者小親をめぐって展開」する『紅葉狂言』(明29・11・12)のあること、更に『新通夜物語』(大6・4)では、『八犬伝』の中でも、女田楽一座の旦開野と名乗る犬士を、自らモデルにする主人公に重ねていることなど、既に確認した。

そんな鏡花と接点の多い暁斎のこの「山姥図」について「作品解説」では先ず、

能の「山姥」は、山姥の曲舞を歌って有名になった都の遊女が旅の途次の山中で山姥に逢う曲。

と述べ、「その詞章によれば、恐ろしい鬼女ではなく人を助ける山の女である」と記している。「人を助ける山の女」は、「不具」の「子供」を慈しみ、「疲れ」果ててたどり着いた僧に、水浴びさせるだけでなく、親の藪医者のもとでは、「薬師様」の「生れ」変わりと言われていた、「孤家」の「婦人」の姿に重なるだろう。更に、

山姥といえは老女のイメージが強いが、江戸時代には金太郎(坂田金時)の母とされ、美しい母親の姿であらわされることもしばしばとなった。本図は能ではなく、この山姥伝説を絵画化している。明治十七年(一八八四)の第二回パリ美術縦覧会の出品作で、暁斎円熟期の代表作である。

と記すが、美しくやさしい母親のような山姥と、熊や鹿などに戯れ、怪童ぶりを発揮する金太郎の版画が、歌麿に多くあること既に見た。ここにあげる図11「山姥と金太郎」は、「美しい母親」姿の「山姥」の典型と云ってよいだろう。構図も図10によく似ている。同ような構図の「慈母観音図」のある暁斎は、この歌麿の図を見ていて、少くとも記憶の中にはあったのではなからうか。春信に始まるかと思われる、似たような構図の女三の宮や、猫と共にいる女たちの立姿も、頭の中にはあったかもしれない。

ところで坂田金時は、『今昔物語集』（巻二十八）や『古今著聞集』（巻九）などに見られ、御伽草子『酒吞童子』でも活躍する。古浄瑠璃で「足柄山の山姥の子」「鬼女の子」とされ、近松門左衛門の浄瑠璃『こもぢ山姥』が出て、「大当り」とすると、「山姥」は人々に「身近なもの」になったと云われるが、

謡曲の「山姥」や古浄瑠璃を原拠に、坂田金時の異常な出生譚、および源頼光と部下の四天王が世に出る経緯を描く（39）その近松の『山姥』を改めて読み直すと、あつと思うことがある。馬琴は、近松のこの作品を重要な典拠の一つにして、伏姫と八房の「物類相感」の物語を、創り上げたのではなからうか。

大江親兵衛が、里見義実（源氏の嫡流、里見治部少輔源季基の長男）の家臣、「八犬士の随一」であるように、坂田の金時は、清和天皇の正統摂津ノ守源の頼光の四天王の一人、「日本無双の大力一騎當千の男子」である。

☆「主有る娘（頼光の許婚・澤渴姫）を奪はんと人畜類の右大将、

と罵倒される女院の弟・清原の高藤にへつらい、その権力の下、したい放題の平正盛の家来に、「やみ討ちに討たれた」親の敵を討つ

図10



図11



ため、「相對づく」の縁を切った妻・八重桐に、既に妹の糸萩が夫（四天王の一人になる確氷の定光）と共に敵を討った、と聞かされるや、金時の父親・藏人時行は、ぐずぐず「ながらへ臆病者腰抜けと。指さ、れんは無念の上の無念なり」と、☆₂短刀を「おっとり。腹に」「つき立」「引き廻し」、次のように叫んで死んでゆく。

我死して三日が内御身が胎内にくるしみあらば。我が魂やどりしと心得十月を待つて誕生せよ。神變、希代の勇力の男子と成つて。今一度人界に生まれ出で正盛右大將をほろぼさん。おことが身も今日より常の女に、ことかはり。飛行、通力有るべきぞ深山深谷を住家とし。生まるゝ子を養育せよさらば。く

と。そして更に、

☆₃ あら不思議や切り口より焰のまろかせ（かたまり）女房が。口に入ればうんとばかり其のまゝ、息はたえてげり。

と記されるが、高藤の手の者が、澤瀉姫を無理矢理に奪い去ろうとした時、「むつくと起き」上がり、

女ともいへ男なり胎内に。夫の魂やどり（中略）妻と成り子と生まれ思ふ敵をうつせみの。體は流れの太夫職。一念は坂田の藏人時行其しるし是見よ

と、「とつては投げとつては投げ」、もと全盛の太夫だったこの女は、「鬼女のごとく」大活躍し、狼藉者が散り失せるや、「姫君に一礼し」、「今よりは我いづくをそこと白妙の。三十二相のかんばせもいかれる眼物すごく」

島田ほどけてさかさまに忽ち夜叉の鬼がはら唐門。樓門四つ足門塀も筑地も飛びこえはねこえ色はねこえ飛びこえ雲を分け行衛も。知らず成りにけり。

と記されて、『姫山姥』の第二は終っている。

ここに登場する「吉野たばこの刻み賣」源七（坂田の時行）と、その女房（遊女の右筆、もと萩野屋の八重桐）には、「当時大坂の新町に実在した」モデルがあつたようだが、「しゃべり山姥」と呼ばれるこの二段目は、

何度くり返し読んでも興の尽きることを知らない。近松の筆の妙を知るによい材料である。⁽⁴⁰⁾
などと云われている。

その二段目の夫・時行の「魂」を「胎内」に「やどし」、「飛行通力」を身につけ、「深山深谷を住家とし」て、生まれた子・怪童丸を、「神變希代の勇力の男子」に育てあげる「三十二相のかんばせ」も美しい「山姥」は、「雷鳴」轟く「山中」で、「夢中」に現れた「赤龍」と通じて公（金）時を孕んだと、頼光に伝える『前太平記』巻第十六の「老嫗」がその原拠であれば尚更のこと、自ら従い共に過ごした八房との「物類相感」で、八犬士の母親になり、わずか四歳の親兵衛を神隠しにして、富山の奥で神童に育て上げ、「八犬士の随一」にする伏姫に重なるだろう。怪童丸が読者（観客）の前に現れるのも、「五六歳の童子」としてである。のみならず（次の☆₁・☆₃は、前述の文のその部分に対応する）、

☆₁ 許婚のある伏姫も、人でなしの安西景連に養女と偽り、妾にされようとしていたこと

☆₂ 懷妊を納得しない伏姫は、護身用の刀で自ら腹をかき切り死んでゆくこと

☆₃ 八房の魂を宿した胎内の傷口から、不思議にも白気が吹き出し、首にかけていた八文字の数珠を包んで舞い上がるや、散り／＼になって地上に落ち、伏姫は亡くなり、親兵衛はじめ八犬士の守護神になること

も。「山姥」も、「鬼神」を「退治」し、高藤・正盛を討つ為に出かける頼光一行の、「かげ身にそう」「守り神」になっている。

ここに、白山山麗尾口村東二口（手取川沿）の「デクまわし」で、『嫗山姥』や『酒吞童子』の演じられていたことも、つけ加えておこう。鏡花も観ていたか、知っていたのではなからうか。鏡花は、近松の書いたものを見て、「一種の美」を感じ、「純感情で書いたものは」、「好きではないが、深く感動せずには居られない」（「文藝は感情の産物也——創作に於ける知識と感情——」明42・6）と云っている。馬琴は勿論鏡花も、「元禄ごろから広く読まれた」（「一種の時代小説」の『前太平記』を、読んでいたのではなからうか。⁽³⁷⁾

十二

ところでこのもと全盛の「太夫」だった「山姥」が、

「竹」の節から生まれた「少女もかくや」⁽⁶⁾

異界の中の母なるものへの憧れ

と思われる程美しい伏姫同様、「三十二相」を兼ね備えた御仏(如来)にも等しい、非の打ち所のない完璧な美貌の持主だったことに注目すれば、その姿は又、『高野聖』の「奥ゆかしい、上品な、高家の風」のある「深山の孤家」の「婦人」に、つながってゆく。この「婦人」は、「父親」の敷医者(の「敷」は、「竹敷」の「竹」につながる)の「娘」として「生まれ」た時、伏姫同様「玉のように」美しかっただけでない、醜い母親の「あの毒々しい左右の胸の房を含んで」、

どうしてあれほど美しく育ったものだろう

と不思議がられ、「十六七」の「女盛り」には、

薬師様が人助けに先生様の内へ生れてござった

と、「信心、渴仰の善男善女? 病男病女が我も我もと詰め懸け」たことを、見逃す訳にはいかないだろう。そしてその「薬師様」、薬師如来の「左手に薬壺を持ち右手施無畏(種々の畏怖を取り除く、筆者注)印の像」が、鏡花がいつも書斎の机の傍に置いていた、赤子を胸に抱く摩耶夫人像(36頁図9)に、よく似ていることも。僧は「嬢様」と呼ばれて羞じらうこの「女」に、「夫人ですか」などと問いかけてもいる。のみならず図6(35頁)の(襲いかかる悪人・蛇九郎らから)幼い親兵衛を抱き取ってかえ上げ、神隠しにする伏姫像を裏返せば、この花をかかげる同じ摩耶夫人像(図9)に、形の上では重なることも。

そして更に、その図6のもとになった『八犬伝』本体の挿絵(35頁図7)の、激しい風雨に注目すれば、それはこの「婦人」と「不具」の子供(親兵衛に同じ)が、「深山の孤家」で襲われた「可恐ろしい洪水」につながるだろう。しかもこの「小児」のまわりに「父親」や「兄者人」の姿はあっても、母親が出てくることはない。「腫物」の「手術」の前の夜、独り残されて、「しくしく」泣くのを、「娘が見つけて」、その「あまり」の「不便さに抱いて寝てや」り、手術が失敗して「不具」になり「泣出す」のを、娘が「あわれがつて抱きあげる」と、その「胸に顔をかくして縋」り(図7の伏姫と、親兵衛の姿に重なる)、「父親が迎に」来ても、「娘の手を放れよう」としない、この「伶俐」で「聞分」のある「小児」には、親兵衛や鏡花(鏡太郎)同様、すがって甘える母親の姿がないのである。

子供は「母を選んで生まれてくる」、「生まれたて」の子の「魂」は、

この母のところに来たかったのだ

と、「確信⁽⁴²⁾している」のだとしたら、「十歳までは神の内」と云われるような年齢で、母親を亡くしてしまった子の魂は、一体どこへ行くのだろう。居場所を失なってしまった恐怖、あるいは畏怖、パニックの中に居るのではなからうか。旅の僧が「土橋」を渡って、たどり着いた「一軒の山家」で目にした「口をあめぐり」あけ、「足」は「投出し」、

鼻の低さ、出額。五分刈の伸びたのが前は鶏冠のごとくなくて、頸脚へ撥ねて耳に被った、啞か、白痴か、

「これから蛙になろうとするような」、この「小児」の姿は、色白の美少年だった鏡花・鏡太郎には、似ても似つかない。だが、

・ 出臍という奴、南瓜の蒂ほどな異形な者を片手でいじくりながら幽霊の手つき

・ 気の抜けた身の持方

などと紹介される、その大きな「出臍」に執着する、「気の抜けた」「幽霊」のような姿に注目すれば、それは先ず、「母様」の死が「承知」できず、いっそのことその胎内に戻ってしまいたいような衝動にかられた、少年・鏡太郎の心の内、心象風景を形にしたものだったのではなからうか。

というのも、「世の中へは目もやら」ず、ひたすらこの「少年」と、「深山の孤家」で暮す「婦人」には、母・すゞの面影があるからだ。

「親仁」に習って、「嬢様」と呼ぶ僧に、女自らが、

貴僧には叔母さん位な年ですよ。

と伝えていること、そしてその僧にくどくどと、

私は癖として都の話を聞くのが病でございませう、口に蓋をしておいでなさいましても無理やりに聞こうといたしますが、あなた忘れるてもその時間かして下さいませうな、(中略) 私は無理にお尋ね申します、

などと云っていることに注目すれば、唐突にしかも、二度と繰り返されることのないこの言葉は、

東京へ帰れたらその日に死んでも構わない。

とまで云っていた母・すゞの姿につながってゆく。のみならず「都にも希な器量」のこの「婦人」の「その姿の佳さ」は、他に比べ

うもなく、「目」も「声」も「清し」く、

『由縁の女』出達。故郷の山三

優しいなかに強みのある、気軽に見えてもどこにか落着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、いかなることもいざとなれば驚くに足らぬという身に応のある

と記されるその美しく気高く威のある姿は、既に見てきた母・すゞにほとんど同じだろ⁽³⁾う。更にこの「婦人」は、「べそを掻いて泣出しそう」な、「腰」の「抜けた」「不具」の夫に、幼な子をあやし慈しむ母親のように「優し」い。

その上更に、「崖の水」で、僧の体一面「瘰癧」のように「練絹のように露していた」この「叔母さん」の「世話」は、「ほすっぽり脱」がされて、自らも「いつの間にか衣服を脱いで全身」「練絹のように露していた」この「叔母さん」の「世話」は、「ほんのりと佳い薫」がして、その「ひたと附いている婦人の身体で」、僧は「気が遠くなつて」、「花びらの中へ包まれたような工合」だったと、私に語っている。この作品の僧と私は別人だが、「生命が大事」の「臆病者」の僧と、その僧に「おもしろい談を」「幼らしく」ねだる私は、微妙に重なっている。というより、いつまでも幼さを残して、母・すゞに憧れる作者・鏡花の分身だと云ってよい。「恍惚」女に「洗わ」せながら、

いつの間にやら現とも無しに、こう、その不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸から次第に天窓まで一面に被ったから吃驚、石に尻餅を搦いて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思う途端に、女の手が背後から肩越しに胸をおさえたのでしっかかりつかまつた。

と語るその僧の若い姿は、母親を「守本尊」にして、身をゆだねている幼な子⁽³⁾のようだろう。そしてそれは又、「出臍」をいじくる「不具」の「小児」のいっそ子宮に戻ってしまいたいような願いにもつながっていく。

ところでこの僧は、既に見たように「土橋」を渡って、「小児」と「婦人」の住む「一軒家」に、たどり着いたのだった。この僧は更に女とともに、「木の丸太」を渡って、「裏の崖」の「綺麗な流」に「下り」立っている。そこは「白い」「十三夜の月」の「光」を「浴びた」別天地だった。「二面の岩」の「上へ谷の水がかかって」、「玉を解いて流したよう」に「美し」い水が、「よどみを作って」、「ちょうど切穴の形」になった「石の盤の上」に、女は「雪のような素足で」「立っていた」。のみならず、「手をあげて黒髪をおさえながら腋の下を」「拭き」、「手拭」を「絞りながら立った姿」は、「ただこれ雪のよう」で、

かかる靈水で清めた、こういう女の汗は薄紅になつて流れよう。

とまで僧は云っている。

「暖い花」のような女の「姿」も「足」も何故「雪のよう」なのだろう。それはただ単に白く美しいことの譬えなのだろうか。この作品は初めから「白」の記述が多い。「飛驒から信州へ越へる深山の間道で」、「およそ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を」、僧は「深々と戴いた一重の檜笠」で「凌いで」いる。「白い、ふらんねるの襟巻をしめ」、「白足袋に日和下駄」の姿で。私と同乗した「汽車」の「窓」の外には、「白い」「雪」が「ちらちら」し始め、その「雪は小止なく」降つて、「白く積つた中を」宿に着いたとしても、「名にし負う北国空」、僧の姿も含め、何の不思議もない。「孤家」の女の首が「白く」「片棲をぐいとあげた」「衣服」のすき間から、「真白なのが暗」に「まぎれ」て、「歩行くと霜が消えて行くよう」に見えたとしても。だが何故、太陽も月も、ことさら「白い」のだろう。

女と僧が「下り」立つた「裏の崖」を、今少し詳しく見てみよう。

・そこは早や一面の岩で、岩は上へ谷川の水がかかつてここによどみを作っている、川幅は一問ばかり、水に臨めば音はさまでもないが、美しさは玉を解いて流したよう、かえつて遠くの方で凄しく岩に碎ける響がする。

・向う岸はまた一座の山の裾で、頂の方は真暗だが、山の端からその山腹を射る月の光に照し出された辺からは、大石小石、榮螺のやうなの、六尺角に切出したの、剣のやうなのやら、鞠の形をしたのやら目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水に蘸つたのはただ小山のよう。

・自分達が立つた側は、かえつてこっちの山の裾が水に迫つて、ちやうど切穴の形になつて、そこへこの石を嵌めたやうな詔。川上も下流も見えるが、向うのあの岩山、九十九折のやうな形、流は五尺、三尺、一問ばかりずつ上流の方が段々遠く、飛々に岩をかがつたやうに隠見して、いづれも月光を浴びた、銀の鎧の姿、目のあたり近いのはゆるぎ糸を捌くがごとく真白に翻つて。などと記されている。

この「大石小石」、「目の届く限り残らず」「一面の岩」で、「いづれも月光を浴び」「銀の鎧」のやうに見えるのは、手取川の水源、

白山の麓ではなからうか。「山頂部は熔岩流の跡」も「荒々しい」「火山」の、「白山を水源」にする「石川、県域で最も長大な手取川」は、「名だたる荒廃、河川」暴れ河である。この川の流れ下る「加賀平野の中央部」は、この川が「生み出した典型的な大扇状地で」、「度重なる氾濫が、この地を石川郡」と呼ばせ、「県名のもと」にもなった。のみならず「高い山なみにはさまれた」この「大地」に、「季節風が吹きつけると」、加賀は「ほとんど全域が著名な積雪、地帯」になり、「白山の北西麓の山間部」は「豪雪、地帯といわれ」、「単なる普通名詞」にすぎなかった「白い山」「白山」が、「加賀と飛騨との国境にそびえる特定の山の固有名詞」になって、都でも「歌枕」として知られただけでない。「この山なみを仰ぎ見る加賀では、

白山は平野の主要部を占める手取川扇状地を育て、そのふところに抱く深い積雪が、下流に豊富な水を与えてくれる

「慈母の座す山であり」、「豊饒をもたらす女神の座として仰ぎ続けてきた」⁽²⁸⁾と云われている。既に見たように、白山を「ふるさとの守護神」のように仰ぐ深田久弥は、この「一年の半分は白い」、「気高く美しい」山が、「沈む太陽の余映を受け」ると、この世のものとも思われなかった。

と云い

澄み渡った大空に、青い月光を受けて、白銀の白山がまるで水晶細工のように浮きあがっているさまは、何か非現実的な夢幻の国の景色であった。

と記している。⁽²⁴⁾その姿はほとんど、水浴の為「婦人」に伴われて来た僧が、「切穴」の「石の盤の上」に立って見た「裏の崖」の姿に重なるだろう。

しかも「加賀白山の優美な山容」が、比畔^{ひめ}(姫)神として「崇め」⁽²³⁾られてきたのなら、そして又「親仁」^{おやじ}に「嬢様」と云われ、若い僧とは、「姉弟が内端話をするような調子」で、

川へ落こちたらどうしましょう

と「婦人」に云われた僧が、

白桃の花だと思えます。

と答えるや、「さも嬉しそくに莞爾して」、「処女の羞を含んで下を向いた」と云うのなら、この「婦人」は、「何か非現実的な夢幻の国」のその比喩神につながるように思われる。と云うより、山蛭に襲われた体の「瘡」を癒す為、「崖の水」に僧を誘った「婦人」が、今時は毎日二度も三度も来てはこうやって汗を流します、この水がございませんかつたらどういたしまし、よう、と云っていること、「孤家」に帰ってから又、

あの流れはどんな病にでもよく利きます、私が苦勞をいたしまして骨と皮ばかりに体が朽れましても、半日あすこにつかつており、ますと、水々しくなるのでございますよ。

と繰り返していること、そして更に、「婦人」に「念」の「懸って煩惱」の「起きた」僧に、「親仁」がその「婦人」の正体を、

天狗道にも三熱の苦惱、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が瘦せて手足が細れば、谷川を浴びると旧の通り、それこそ水が垂るばかり、と告げていることに注目すれば、この「婦人」は、「白山の主神に据えられた菊理媛」にほとんどつながってしまう。

キクリ（菊理）はククリ（潜り）を意味して、水中に入ってミソギすること

で、この「崖の水」が、生きとし生けるものに「水々しく」命を与える「霊水」なら、まさにびったりだろう。

十三

そしてその「ヨミガエル」ための「ミソギ」に注目して、『特別展 河鍋曉斎の能・狂言画』の、

33 山姥と金太郎図（48頁図12）

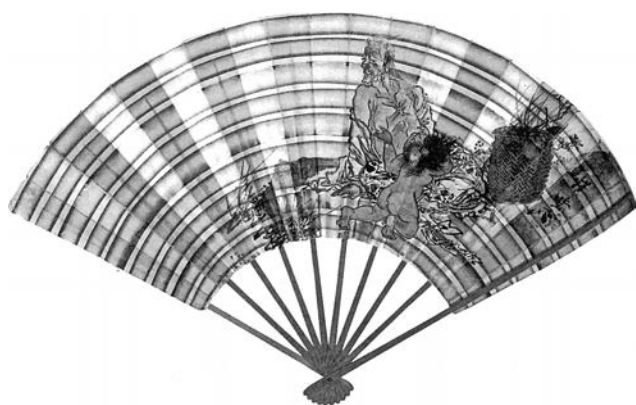
を見れば、既に見た図10（39頁）の「毅然とした若い母親として描かれる山姥」（それは僧の前に現われた「孤家」の「婦人」に同じ）とは余りにも違う、その「老いた」「皺だらけの山姥」の姿は、「作品解説」に、

仕事の間に一休みしているのどかな母子の情景に映る。

と記される文とともに、『高野聖』の謎を解くヒントを、与えてくれるのではなからうか。

異界の中の母なるものへの憧れ

図12



作者（私）は、

後で聞くと宗門名誉の説教師で、六明寺の宗朝という大和尚
だった旅の僧を、

・ 一見・僧侶よりは世の中の宗匠というものに、それよりむしろ俗か。

・ 慎み深そうな打見よりは気の軽い。

などと云うが、この作品には、作品の鍵になるような言葉に、『藤栗毛』の好きだった鏡花らしい）
笑いにも似た仕掛、遊びがあるようだ（とは云っても鏡花は、作品の手の内の要の部分は見せたが
らないので、気をつけなければならない）。

図12の「丸々とした」裸の金太郎の後姿を、「蛙」のようだと見るのは、僻目だろうか。と
いうのも、「大当り」だった『嬬山姥』以後の錦絵や草双紙には、腹がけをしたり（39頁図11な
ど）、それもない裸（39頁図10・12など）の金太郎と山姥の図が多く、^{（37）}「孤家」に「婦人」^{（おんな）}と居た
のは、

これから蛙になろうとするような少年、

であり、親仁は僧に、

仔細^{しさい}あつて、あの白痴^{ばか}に身を任せて、山に籠^{かこ}つてからは神変不思議、年を経るに従うて神通
自在^{じざい}じゃ、

と告げ、又、

あの白痴殿の女房^{めいぼう}になって世の中へは目もやらぬ換^{かわり}にやあ、嬢^{ぢやう}様は如意自在、

などと云って、その言葉は、先述の親仁の言葉に続いてゆくからである。蛙は「水死した男」を意味する「蛙^{かむす}（河津）」であるだけで
なく（後述）、「ヨミガエル」の「カエル」でもあったのだろう。「薬師様」の生れ変りなどと云われるその「薬師如来」が、

衆生の病苦などの苦患を救い、身体的欠陥を除き、さとりに至らせようと誓った仏。⁽⁴⁴⁾

であるなら、「父親の医者」の手違いで、「兩足」の「立」たなくなった「小児」に「行届いた世話」をする「娘」が、「殊にその洪水以来、山を穿ったこの流れは天道様がお授けの」「神通自在」の水になり、「白痴に身を任せて山に籠」り、「苦勞」して「骨と皮ばかりに」なっても、「半日」「つかって」と、水々しく「ヨミガエル」のだとしても不思議ではない。

にもかかわらずこの「荒々しい」「火山」の「谷川の水」は、「男を誘う怪しの水、生命を取られぬものはない」のである。親仁は僧に、何か御坊にいうたであろうが、それを実とした処で、やがて飽かれると尾が出来、耳が動く、足がのびる、たちまち形が変わるばかりじゃ。

いややがて、この鯉を料理して、大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

と告げるだけでない。

・道を迷った旅人は、娘様と思うままはツという呼吸で変するわ。

・御坊は、孤家の周囲で、猿を見たらう、墓を見たらう、蝙蝠を見たらう、兎も蛇も皆娘様に谷川の水を浴びせられて畜生にされたる輩！^{やから}

と云い、僧も又、

あわれその時あの婦人が、墓に絡られたのも、猿に抱かれたのも、蝙蝠に吸われたのも、夜中に魍魎魍魎に魔われたのも、思い出して、私はひしひしと胸に当った。

と語っている。

ここで改めて、図10・11・12の山姥に注目してみよう。歌麿の描く山姥(図11)の突出した美しさは一目瞭然だが、「遊女のように引き摺るほど裾長」の着物を着た山姥の姿は、『囀山姥』の怪童丸(金時・金太郎)の母親(山姥)が、もと全盛の太夫・八重桐だったことを思えば、何の不思議もない。「当代女絵銘人」の名を恣にし、浮世絵の世界で、人間にとっても「芸術」にとっても、「永遠のテーマ」である「母と子」を、「意識的に、繰り返し」描いた歌麿は、それを知っていて、「寛政の改革の余波の中で」「版元」の求めにも

応じ、「遊女に代えて山姥を登場させた」のだろうか。「歌麿美人画、そのまま」の「幼児の母にふさわしい年齢の美女」は、「遊女を描いていた美人画の手法や春画の世界を意図的に」「持ち込んでいたとも解され」、「和やかな母子像を通り越して、男児と母親の間の性的な空気を感じさせる」などと云われるが、「少年文学界の泰斗」として『日本昔噺』に『金太郎』(明29・4)を出していた巖谷小波は、不評だった鏡花の処女作『冠弥左衛門』(明25・10・11)が世に出るきっかけを作った、いわば恩人に等しく、『金時計』(明26・6)や『一人坊主』(明28・4)など、少年向けの作品も書いていた鏡花が、これら歌麿の「山姥と金太郎」の錦絵を見ていたとしても、何の不思議もない。そしてそのことが、『高野聖』の「孤家」の「婦人」と夫でもある「子供」の世界へとつながったとしても。

のみならず、図10(39頁)の山姥にまわりつく犬や猿を見れば、「婦人」にすり寄り、隙あらばとねらう「猿」や「墓」「蝙蝠」、「鳥」や「羊」など、得体の知れない「もの」は先ず、鏡花の意識の中で、金太郎(怪童丸)や山姥とともに絵草子に描かれる動物たちと、無関係ではなかったと思われる。

更にその上、図12(48頁)に近い姿の山姥もいる山中での金太郎らの遊びの中に、食べることやままごとの好きな子供らしく、料理を作る場面もあり、俎の上には魚や鯉がのつていたりもすることに注目すれば、「世阿弥作」かといわれる能の『山姥』や近松の『山姥』では、「越後」や「信州」の「上路」だった「山姥の住処」が、「江戸の人々には」「親しみやすい」からか、古浄瑠璃などに見られた「足柄山」になり、富士山がそれら絵草子にしばしば見られるようになると、この山姥と金太郎の世界は又、『八犬伝』につながってゆく。

「血氣に逸って近道をし」道に迷い、「深山の孤家」にたどりついて「馬」に変えられ、「婦人」の「大好物」の「鯉」になる「富山の売薬」「反魂丹売」は、『八犬伝』(肇輯卷之五第九回)で、

綸言汗の如し

と、犬の八房に従おうとする伏姫に、父・義実が「返しかたきは口の過」と語る『搜神記』の「牡馬」を、換骨脱胎したものだっただろう。「大古」の昔、「遠征して、久しく帰らない」「親」を慕って、母親も亡い「只ひとりの女の子」が、飼っていた「牡馬」に云ったのである。父親を乗せて帰ってきたなら、

わが身をまかすべし

と。だが約束通り「父を乗せて」還った馬は、父親に「竊に」殺されてしまう。そしてその「簷に掛た」「馬皮を見」た「女兒」が、畜生にして人に求媾し、報はいかに早からずや。皮になりてもなほ吾儕を、娶るやいかに「罵」るや、「その皮撲地と落かゝり」、「女を」「推包」んで、「吹上る風と、もに、中天に閃き登り、次の日庭の桑の樹に、その亡骸」は掛っていたと云うのである。

『高野聖』の「婦人」は、僧に「目をつけ」暴れる「馬」を見て、「富山の売薬」が「一足先に」「この路へ入」ったと聞くと、「会心の笑を洩して」、「およそ耐らなく可笑しいといったはしたない風采で」、

しようがないねえ、

などと云っている。そして「細帯を解きかけ」、「畜生」のくせに、「人に求媾」ようとする馬の、「大きな鼻頭の正面」に立ち、「頤の下へ手をかけて、片手で持っていた単衣をふわりと投げて、馬の目を蔽うが否や」、

仰向けざまに身を翻し、妖気を籠めて朦朧とした月あかりに、(中略)衣を脱して搔取りながら下腹を衝と潜って横に抜けて出た。

と記されている。既に見た『高野聖』(明41・2)の口絵(30頁図3)とともに、雑誌『苦楽』(昭24・8)の表紙に、暴れる馬の首を背景に、櫛を口にした仇な女を描く清方も、この部分と『八大伝』『搜神記』との関係は、知っていただろう。

この『搜神記』の「女兒」と「馬」の話は、「桑の樹に」掛けられた「女兒」の

屍より虫生ぜり、是蚕也といふ。

と終るが、これと少し形の異なる「馬娘婚姻譚」が、鏡花の絶賛した『遠野物語』(明43・6)にもあり(六九)、「オシラサマの起源を語るもの」としてよく知られるようだが、イタコの唱えるオシラ祭文は、「東北地方独得のものでなく、白山信仰圏にもある」と云われている。⁽⁴⁶⁾

その白山信仰について知りたいと思っても、なかなか思うようにはわからない。養老元年(七二七)泰澄によって開かれ、「延暦寺別院」になって、都でも無視できない程賑い、猿楽も上演され、応仁の乱後は、都から逃れて来た「大和猿楽の洗練されたものが」、朝

倉氏の庇護のもと越前「各地で行われた」と云われるが、「利権」などを巡る人の世の醜い欲望や争いに巻き込まれ、白山三馬場のうち、加賀白山比咩神社は文明十二年(一四八〇)に、越前平泉寺も天正二年(一五七四)に、一向一揆の兵火で焼失し何も残らないからだ。⁽²⁵⁾「鎌倉時代、室町時代に全盛」を誇り、能が幕府(武家)の式楽になった「江戸時代になって衰え始め」、「明治初年の神仏分離令によって」、「いつきよにその姿を没した」美濃長滝白山神社も、

明治三十二年(一八九九)四月十日に民家からの出火で類焼し、神殿、拝殿、伽藍がすべて灰燼に帰した。

と云われている。⁽⁴⁷⁾『高野聖』が世に出るのは、その翌年の明治三十三年二月。ほぼ一年遅れだが、春陽堂の正社員になった鏡花は、前年のその出火を知っていただろうか(後述するように、柳田国男とのかかわりの中で、知っていたと思われる)。

というのも、「古代から信仰の場として崇められ」、「そのまま神仏習合の地となった」と云われる三馬場のうちでも、長滝白山神社を中心にした美濃・飛騨周辺が、『高野聖』により深くかかわっていると思われるからである。この神社には正月六日、「六日祭」とも「蚕飼祭」とも、

蚕の繭をあらわす造花の奪い合いをする

ので、「花奪祭」とも云われる祭があり、この日は「例年のように大雪」になると云われ、奪い「取られた造花はかつて養蚕守護のお守りとして各家に持ち帰られた」といわれていることを、先ずここに記しておこう。というのも伏姫神は木花開耶姫だが、木花開耶姫は「養蚕の守護神」だからである。⁽⁶⁾そして又長滝白山神社は、「白山から尾根づたいに石徹白を経て下山した泰澄」が、「森」の中に「祀られていた」「三日月形の神石」を見つけ、その「古代信仰の地」に建立したと云われるが、「白山信仰の中心の場として」栄えたその「神の村」・石徹白は、かつて「馬の飼育も盛ん」な「馬の産地」だったと云われているからである。⁽⁴⁷⁾

十四

ところで旅の僧が私(作者)に、

これから越前へ行って、派は違うが永平寺に訪ねるものがある

と云っていることに注目してみよう。というのも、永平寺は「平泉寺白山社」とは地続きで白山信仰とはことのほか縁が深い⁽⁴³⁾からである。開祖・道元が、「中国から日本へ帰る前日」、「一夜碧巖」と称えられる『碧巖録』を、「白山妙理権現が現われて助筆した」（と信じられている）ことから、「本山である永平寺を白山の膝下に構えた」と説明され⁽⁴³⁾ている。そんな永平寺に縁のある旅の僧は、「近道」を選んだ「けたいの悪い、ねじねじした」「富山の売薬」を、「見殺」にはできないと、生きて還ることなどない⁽⁴³⁾と忠告された「旧道」を選んだのである。臆病で命のおしい弱虫でも、「山林抖擻」の高野聖である旅の僧が、自ら選り踏み込んだのは、死者・死霊の集まる山だったと云っている。蛇（越前九頭竜川の竜に重なる）や山蛭の群（蛭の地獄に重なる）に苦しめられるその山中について、旅の僧は、

・ 神代から杣が手を入れぬ森があると聞いた
・ 山蛭は神代の古からここに屯^{いとしへ}していて、

などと云っている。「恐ろしい山蛭」が「神代の古から」屯^{たむろ}していて、人の来るのを待^{まち}っていた、そんな「飛驒国の樹林^{きはやし}」の中で、助かるまい、ここで取殺される因縁らしい

と、「取留めのない考えが浮んだのも」「知^ち死^{しか}期^きに近い^{ちかづ}たからだ」とふと「気付いた旅の僧が、

どの道死ぬものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見ておこう

と「覚悟^{かくご}」を極め、「踊り狂う」ように「歩行^{あるき}出した」時、「禍^{わざわい}は」「絶頂」だったらしく、「遙に一輪のかすれた月を拝^{をが}み、「蛭の林」を出るのである。

そして「土橋」を渡り、「一軒の山家」に着くと、そこはまるで別世界だった。「小児」がいて「女」がいて、様々な動物がいて、「親仁^{しんじん}」がいる。「親仁^{しんじん}」を除けば、「声も清^{すず}しい、ものやさしい」「都にも希な器量」の女と、「亭主」なのに「これから蛙になろうとするような少年」、そして女にまといつく動物たちの世界の、そのベースにあるのは、既に見たように、歌麿や晁斎などの描く「山姥と金太郎」の絵草子の世界である。だが『高野聖』に描かれるのは、そんなメルヘンのような世界ではない。「馬」は「婦人^{おんな}」に「はしたない風采で」笑われ、僧には「どこまでも人を凌^{しの}いだ仕打」の「厭^{いと}な壮佼^{わかしお}」と云われた「助平野郎」で、やがて「婦人^{おんな}」に「馬」にされ、

「馬市で錢」になつて「鯉に化け」、「婦人」の「大好物の晩飯の菜」になつている。その「婦人」の「背後から」「背中へ」「抱きつ」き、

・畜生、お客様が見えないかい。

・お前達は生意氣だよ、

と「激しく」罵られ、「天窓」を「くらわ」される「猿」や、「崖の水」まで僧を案内する「婦人」の前に、「のさのさ」出て来て、

・あれ、気味が悪いよ。

・お客様がいらつしやるではないかね、人の足になんか搦まつて、贅沢じゃあないか、お前達は虫を吸つていれば沢山だよ。

・お前達と友達を見たようで可愧い、

など云われる「墓」やその他、夜中に「遠くの彼方からひたひたと小刻に駈けて来る」「羊」や「鳥」や「牛」、「二本足に草鞋を穿いた獣」など、「さまざまにむらむらと家のぐるりを取巻く」「魑魅魍魎」は、美しく「清しい」「婦人」の対極にいる、醜い欲望に支配されたものだろう。それはあたかも、「物の怪」の「もの」のようだ。

そしてこの「畜生道の地獄の絵」さながらの世界は、翌日谷川の「滝のある処」で、「婦人」に「念が懸つて煩惱が起き」、「旧の孤家へ引返」そうとした旅の僧が、突如声をかけられ、

閻王の使ではない、これが親仁。

と「喫驚して」いることから類推すれば、「白山の主神に据えられる菊理媛」にも等しいこの「婦人」の居た処は、能の『黒塚』の「鬼のすみか」にもつながる、死者の世界だったろう。既に見たように、白山は「雪が消えない」だけでなく、天に近い山という山がそうだったように、「死者」の赴く山、その「霊のあつまる」所⁽⁴⁶⁾だった。そして又、

白山比咩は当初イザナミだったのに、いつの頃からか菊理媛に変わった。

と云われ、イザナギがイザナミの「腐乱した死体」に驚いて、「黄泉平坂まで逃げ帰り」、「イザナミと問答した直後のこと」、菊理媛と並んで泉守道者も控えていた⁽⁴³⁾

のなら、この「黄泉の国の入口を守る」「泉守道者」は、『高野聖』の親仁に重なつてゆく。「手取川を遡り市ノ瀬から白山山頂を目指し」

た池大雅は、「命の糧を恵み、時には荒ぶる山ともなる白山を崇拜し、畏敬する素朴な白山信仰」の中から生まれた「かんこ踊り」を、二度も見学しているが、瘦せた「山の斜面を利用した」「出作り」（そこで蚕のための桑の栽培などした）がなくなり、以前とは違い、手取川上流の牛首で催される「白山まつり」で踊られる「かんこ踊り」の翌日には、「白山延命水」の催しがあり、「延命長寿を願う多くの見学者に白山の水が振る舞われる」のなら、ヨミガエリの水も、白山にかかわる事実（言い伝え）に基づくものだったろう。

そして「孤家」の僧や馬の前で、「忽ち犯すべからざる者」になり、

神か、魔かと思われる

「月下の美女」の背後には、十一面観音を本地とする白山妙理大権現（菊理媛命とも）⁽²⁸⁾ がいる。白山を開山したのは、越前国麻生津生まれの泰澄だと云われている。養老元年（七一七）、「貴女の霊夢によつて白山登拝を決意し」た泰澄は、「山麓の林泉（現在の平泉寺、福井県勝山市）で妙理大菩薩と号する白山神を感得し」て、その後更に頂上に登り、

池から示現した九頭竜の本地を十一面観音と感得し、

「別山では聖観音、大汝峰では阿弥陀如来を感得した」⁽⁴⁹⁾ などと云われている。加賀と越前の間には、「江戸中期まで」「白山山頂」の「所属をめぐ」つて紛争が続き、そのせいか白山三所本地の比定も、「泰澄伝承が越前側からの登拝修行者によつて作られたことをうかがわせる」⁽⁴⁹⁾ などと云われるが、先ず越前・九頭竜川の竜の前身は蛇。売薬を「見殺」にしたくないと、命にかかわる「旧道」を選んだ僧は、「生得大嫌」な「蛇（長虫・大蛇）」に、何度も脅かされている。「深山の孤家」にたどり着いた時、

南無三宝、その白い首に鱗が生えて、体は床を這つて尾はずると引いて出ようと、また退った。

と云っているように、その「婦人」の背後に、その蛇（竜）がいると考えてよいなら、その女が、

・うまれつきの色好み、殊に又若いのが好じゃ

・やがて、この鯉を料理して、大胡坐で飲む時の魔神の姿が見せたいな。

などと云われても、何ら不思議ではないだろう。にもかかわらずこの「婦人」は、口もろくにきけない「白痴」で「不具」の、

これから蛙になろうとするような少年、

に「つきそ^{かいがい}い」、「効^{かい}々しい女房^{ぶらう}ぶり」の「世話」もして、「蛭」に襲われ疲れ果てて、「孤家^{ひとりや}」にたどり着いた旅の僧には、処女のように慈母のように優しい。そこに女の「生れ」変りと云われる薬師如来だけでなく、この観世音菩薩の姿が重なっていたとすれば、何の不思議もない。白山神は、「疱瘡^{かそう}治^しの神様」「子供好きの神様、お産の神様として」も「崇められて」きた⁽⁴³⁾。そしてその、

優しいなかに強みのある、気軽に見えてもどこにか落着のある、馴々しく犯し易からぬ品の可い、いかなることもいざとなれば驚くに足らぬという身に応^{こたえ}のあるといったような風の婦人^{おんな}

の姿に、母・すゝの面影のあること既に見た。又そのすゝと水との関係についても、前稿⁽³⁾でや、触れた。本稿では今少し詳しく見てゆこう。

十五

というのも、

『高野聖』と双壁をなす神品⁽⁵⁰⁾

と云われる『歌行燈』（明43・1）に、次のような箇所があるからである。

維新以来の世がわりに、……一時私等の稼業^{ひしきり}がすたれて、夥間^{なかも}が食うに困つたと思え。弓矢取つては、万石、大名株の芸人が、イヤ楊枝を削る、かるめら焼を露店で売る。……蕎麦屋^{そば}の出前持になるのもあり、現在私^{おし}がその小父御^{おじご}などは、田舎の役場に小使いをして、濁り酒のかすに酔つて、田圃^{あぜ}の畝に寝たもんです。……

その妹だね、可^いいかい、私の阿母^{あは}が、振袖の年頃を、困る処へ附込んで、小金を溜めた按摩^{あんま}めが、些^{ちつ}とばかりの貸を枷^{かぎ}に、妾^{めかけ}にしよう、と追^おい廻^{まわ}わす。——危く駒下駄^{こまた}を踏返して、駕籠でなくつちや見なかった隅田川へ落ちようとしたつぎ。——その話にでも嫌^{きら}いな按摩^{あんま}めが。

などと。

白山信仰は、

一向一揆や明治の神仏分離、ひいては戦後の神社改革で、壊滅的な打撃をこうむったはずなのに、今なお脈々と生き延びている。⁽⁴³⁾と云われるが、「舞台は神の座」などと云われるように、天下泰平・五穀豊饒・息災延命などを願い、神仏に感謝し、共に遊び遊ぶ神事芸能の一つとして、南北朝以前から、その白山信仰と共にあった能（猿楽）も、既に見たように、加賀白山寺と越前平泉寺が、一向一揆で壊滅的な打撃を受けるや、美濃長滝寺近辺を残して、史料と共に能面なども、ほとんど無くしてしまっただけ。⁽²⁵⁾にもかかわらず大和猿楽に勧阿弥・世阿弥親子らが出るに及んで、足利氏は勿論秀吉など戦国大名にも好まれ、徳川幕府の式楽にまでなつて、「加賀藩前田家の歴代藩主」も「愛好し」栄えた能は又、幕府瓦解と共に、壊滅的な状態に陥っていた。にもかかわらず岩倉具視らが「欧米を視察」する（明4・10～明6・9）に及んで、「能の価値は再認識」され、「国家的儀式典礼の楽として、かつオペラに匹敵する上品で優雅な芸術として」、明治十三年頃その名も「能楽」に変え、宝生九郎らを中心に再出発するのである。⁽²⁰⁾

この文の「私」は恩地喜多八、その複数のモデルの中に、「宝生流の双壁とうたわれた」、松本金太郎の子・長がいる。そして又、「その小父御」・恩地源三郎のモデルの中には、家元の信任厚くその片腕として、「宝生流の副将」などと称された松本金太郎がいる。⁽⁵²⁾すゞの実家の維新後の困窮ぶりについては、既に見たが、⁽³⁶⁾すゞは金太郎の「妹」でも、長の「阿母」^(わふくろ)ではない。だが、鏡花が金太郎を敬愛し、『卵塔場の天女』（明2・4）の主人公・橘八郎が、「鏡花の化身である」と同時に、その面影の「よく似てくる」金太郎にも重なる「能役者」であることも既に見た。⁽³⁾のみならず新保千代子は、食うや食わずの果に、紅葉宅に住み込んだ鏡花が、金太郎の消息を耳にし、馳け着けた折の親子にも劣らぬ様を伝えている。⁽⁵³⁾

『高野聖』は、三層の異質の時間が、「入れ子型」になった作品だと、指摘した笠原伸夫は、第二の枠の語りの現在を明治十年代とし、その「十三年前」に起った「洪水」を、明治維新前後だと述べている。そしてその「洪水の後親類縁者のすべてが死に絶え、山中の孤つ家に残された」「小児」は十一歳、医者^(ことも)の娘は十六、七歳だったとしている。⁽⁵⁴⁾能の世界に深くつながる鏡花が、明治維新を、何もかも奪い去る「洪水」にたとえたとしても不思議ではない。

慶応四年七月（慶応四年九月に明治と改元）、一家と共に金沢へ下る時、すゞは十五歳、まだ「振袖の年頃」だった。後に鏡花の養女・

名月は、おばあさん(祖母・きて)のこととして、「江戸」の人間だったすゝの為、「隣村」にしかない「江戸風に結える髪結い」を探して、「家へ呼んで」すゝの髪を、「江戸風に」「結わせ」たこと、すゝに「こたつに当りながら、羽つきをして遊ばせ」たこと、北陸の冬は「雪が積もって」寒いから、「炭火の入った、あたたかい、引出しのつい」た、「ぼっくりの下駄をはかせ」たことなど、すゝを「たいへん可愛がって、大事に」したと伝えている⁽³³⁾。息子⁽³³⁾の嫁に対するこの異常な程の心遣いは、ひどいあばた面だったきての、思春期のすゝの痛ましい過去を、思いやつてのことだったろう。そしてそんなことは勿論、十歳にも満たない幼い鏡太郎の前で、誰も話さなかったに違いない。そして又すゝも、幼い我が子に、「妾」にされかけたことなど、口がさけても金輪際云わなかったに違いない。たとえば、「人は獣」と云っている『化鳥』(明30・4)の「母様」が、「お猿」を「からかつて」、「川へ落こちて溺れそう」になり、「沈んで行く」水の中で「救われ」、「助けてくれたのは誰」と聞いた時、「私がものを聞いて、返事に躊躇」したのも、「顔の色」を変えたのも、「小さな声」で云ったのも、「この時ばかり」で、と私が記しているように。そして又「母様」が、それはね、大きな五色の翼があつて天上に遊んで、いるうつくしい姉さんだよ。

と答え、「私」が、

鳥なの

と聴くと「少し口籠って」、「うるさくいつたら」仕舞には、「お前には分らない」と云っているように。

「化鳥」という言葉は

江戸時代、加賀国(石川県)で売春婦をいう。

などと云われるが、⁽⁴⁴⁾「橋の袂」の「箱のような、小さな番小屋」で、わずかばかりの「橋銭」を頼りに、幼な子と暮しているこの女性に、「まだ私が母様のお腹に居た時分」、

初卯の日、(中略)腰元二人連れて、市の卯辰の方の天神様へお参んなすって、

などといった過去のあることを思えば、この「清い眼」の「気高い美しい、頼母しい、穏当な」母様も、母・すゝに重なり、その母の姿が、川の水と共に繰り返し語られることを思えば、後に天才と仰がれる鏡太郎は、「十歳までは神の内」と云われる年齢で、鏡

にでも映すように、すぐの痛ましい過去は知っていたのだと思われる。そして金銭などの奢りに結びつくと共に、制御できない程の按摩嫌いになったのだろう。⁽³⁶⁾ 既に見た『黒猫』（明28・7）も、「伏姫の物語」に重ねて心配する母親の忠告も無視して、「小犬の様」な「黒猫」を寵愛する「士族」の娘（十七歳）お小夜が、「財産ある仕舞屋の長子」（長子は家と共に、その財産も継ぐ）で、「激烈な」「天然痘に罹り」「両眼」盲てしまった「死神か幽霊」のような男（年紀は三十三）・富の市に恋慕され、彼女の愛する「猫」になりたいと、命がけで付きまとわれる話である。

この作品には、「落籍され」た元「新橋の芸者」と共に、「この地に移」り住んだ仁俠肌のお小夜の髪も結う女「髪結」も絡んで、命がけの「切ない」恋物語が展開されるが、⁽³⁵⁾『歌行燈』にもとれば、「能楽界の鶴」とまで云われた喜多八の心に、按摩に「妾に」と狙われ、死のうとまで思い詰めた、「振袖の年頃」の母親の姿がなければ、「二十四の前厄」の「若氣の一図」とはいえ、見えない両眼で、汝が身の程を明く見るやう、療治を一つしてくれう。

などと、

旧は然る大名に仕へた土族の果

の、「二面、念入りの黒痘瘡」の按摩鍼、惣山の自宅に乗り込み、「妾三人で赫とし」て、憤死させることはなかったらう。そして又「背中を揉んで」いた「十六七」の「芥溜に水仙」（後述するが、信如が美登利に置いていった「水仙」にかかわるか）か「鶴」かと思われる「結綿」の美しい、宗山の「娘」、お袖を、「妾」の一人と間違え、

可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物にされるな。

などと云わなかったらう。更に又、何も知らないお袖が、宗山の死後「継母に売られて」、「奉公とは嘘のように違」う所で、お三重と名を変え、ひどい折檻にあい、憎まれ蔑まれ苛められて、転々と居場所を変えながらも、

心ばかりで長い事、思つて居りますお人があつて、（中略）……たとひ殺されても死んでもと、心願かけて居りました。

と喜多八が「唯一言、（人のおもちゃに成るな）」と言ったのを「命がけで守つて」、喜多八の「一生の思出」になる、「可愛い娘」になることもなかったらう。のみならず、喜多八の慢心を許さなかった叔父で師匠の「当流第一の老手」・恩地源三郎の怒りに触れ、「立

処に勘当され、「門附の果敢い身の上」になっていた喜多八に出遇い、謡曲『海士』の舞を伝授され、旅先で「甥」のあるその舞を見て、すべてを了解した源三郎に、「嫁」と認められることも。

「若気の過失」とはいえ、「畜生の浅間しさ」、慚愧に堪えず、宗山に殺されるつもりで、喜多八が舞の伝授の為に選んだ場所は、宗山がくびれて死んだ「鼓ヶ嶽の裾にある、雑木林の中」である。お三重はまるで「天狗様（宗山も喜多八もそうだった）に攫はれる」思いで、「夢やら現やら」「唯茫」として、「殺されたら死ぬ気で」、女一人「夜の明けぬ内に」出かけて行く。そしてお三重は

……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流の音と聞こえます、雑木の森の暗い中で、其の方に教はりました。……舞もあの、さす手も、ひく手も、唯背後から、背を抱いて下さいますと、私の身体が、舞ひました。

と、桑名の湊屋の源三郎の前で云っている。お三重の「背後から、背を抱いていたのは、喜多八であると同時に、父親の宗山でもあったろう。」「鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流の音」は、鼓や謡の音色にも似て神韻縹渺と、まるで誰も踏み込めない富山の山奥で、八房の煩惱を鎮めた、法華経誦の伏姫の声のようだ。そして又、喜多八や宗山の「畜生」のような「浅まし」「慢心」を鎮めた、一途で命がけのお三重の「すつと美しい」舞姿は、一心に経を読む伏姫の姿にも重ねることができ(56)る。

この作品は、喜多八の「嫁女」と呼ばれたお三重が、「当流第一」の能役者・恩地源三郎の謡と、「小鼓取つて、本朝無双の名人」、辺見秀之進の鼓に支えられて、「瞳の動かぬ氣高い顔して、恍惚と」舞う中に、

何処としもなく虚空に笛の聞こえた時（その笛の音は、まるで按摩宗山・惣市が、吹いているかのようだ）、（謡を禁じられていた）恩地喜多八は唯一人、湊屋の軒の蔭に、姿蒼く、影濃く立つて（罪も許されたかのように）謡ふと、月が棟高く、廂を照らして、渠の面に、（まるでお三重の舞）扇のやうな光を投げた。

と余韻を残してハッピー・エンドになるが、「讃岐志度寺の縁起として伝えられる玉取説話の舞台化」といわれる謡曲『海士』⁽³⁹⁾は、鏡花の母恋を語るには、恰好の素材だったろう。「龍宮（鏡花の憧れの場所だった）へ取られ」た「面向不背の珠」を取り返す為、我が子ゆゑに捨てん命。露ほども惜しからじ

と、海に飛び込んで亡くなった母親追善の為、その子が志度の浦を訪れ、母親（海女）の霊に出会う形になっている。その舞を舞うお

三、重の「服紗」や着物の「襟」、「舞扇」の「細い包」が、「紫」色であるのも、彼女が母・すゞに重なるからだろう。物毎に敏感な「振袖の年頃」に、「此とばかりの貸を柳に」、「妾に」と狙われ、「隅田川へ落ちようとした」すゞ（喜多八の母）と、継母に売られても、「人の玩弄物」になるまいと、「純潔」を守り、折檻の為海に沈められたりするお三、重の姿は、一と続きだと云っていい。

『高野聖』にもどれば、幼い頃鏡太郎がすゞの胸に抱かれて、あたかも、「崖の水」で「婦人」と水浴びする旅の僧が、さうやって何時の間にやら現ともなしに、こう、その不思議な、結構な薫のする暖い花の中へ包まれて

いるかのように、うとうとするうちに、すゞが「駒下駄を踏返して」「川へ落ち」、「白桃の花」のように水にもまれ、「花片が散込むよう」に流れてゆくのを、事実であるかのように、幻に見ることがあったかもしれない。そしてその母・すゞの姿が、

それが本当であつたことか、又、生れぬ先にでも見たことか、（中略）或は夢かも知れぬ

（「幼い頃の記憶」明45・9）

「五つぐらゐの」「幼い時」、「母の膝に抱かれて」「船」の中で見た「十七ぐらゐ」、「或は十二、三、せいぐ四、五」の、「縮緬の派手な友禪」の「淋しい顔立ち」の「何とも言えぬ美しい」「女」に重なつて、無関心ではいられなかった、その

切るに切り難い何等かの因縁の下に生まれて来たような気がする

女が、桃太郎・すゞであり、⁽³⁶⁾「不便でなら」ず、旅の僧が夢見たように、

傍につき添つて、朝夕の話對手、草の汁で御膳を食べたり、私が櫓を焚いて、婦人が鍋をかけて、私が木の実を拾つて、婦人が皮を剥いて、

そんな生活でもかまわない、などと思うことがあつたかもしれない。鏡花とすゞの生活は、食事など質素でつゝ、ましかつたと云われている。又「深山の孤家」の「婦人」につきまとう、「畜生道の地獄の絵」さながらのものを嘲笑い、恥かしがる「婦人」の姿も、幼くして芸妓屋に売られ、「生疵の絶間もない」程いじめられて、同じ年頃の子供に近づくと、

売婦め、お玉杓子め、汚らわしい！（この親のない「お玉杓子」は、『高野聖』の親のない「これから蛙になろうとするような少年」につながる）

と「仰けに引くりかえ」されて、「泥水を飲んで真蒼にな」り、「私ばかり、情ないものを、辛いものを、慰めてこそくれずとも、売婦

だといって突^つ転^{ころ}がした町の奴等^ら、「あそびに來^きせ」たら、

蹴^き飛ばしてやろう、おのれ、見返^{みかへ}してやろう、おのれ誑^{だま}してやろう、騙^{なま}ってやろう、死ぬ^なような目にあわしてやろう。泡を吹かせずにおくものか

と、死ぬ^しぬ^ぬ気で芸を磨^ひき、売れっ^う妓^ぎになつてゆく『湯島詣』の蝶吉⁽³⁾・すゞがモデル⁽³⁶⁾の姿に、重なるだろう。恋人の神月梓⁽³⁾・鏡花⁽³⁶⁾がモデルは、泥^{どろ}水^{みづ}稼^が業^{ぎょう}の仲^{なかつ}之^の町^{まち}で育^はつたにもかかわらず、「心は美しく、磨^ひいた鏡^{かがみ}のような」蝶吉⁽³⁾を、「泥^{どろ}の中^{なか}」の清^{きよ}らかな白^{しろ}い「蓮^{はちす}」のように、いとおしんでいる⁽³⁶⁾。それは『高野聖』の僧^{そう}が、「孤家^{ひとりや}」の「婦人^{おんな}」を、あたかも初恋^{はつこい}の少女^{しょうじょ}のように、「白桃^{はくたう}の花^{はな}」にたとえていることに同じだろう。この僧^{そう}は夜中^{よなかつ}に「婦人^{おんな}」が、「魑魅魍魎^{ちみもろうろう}」のようなものを相手にしても、その「声^{こゑ}」の「判然^{はつきり}と清^すしい」ことを見逃^{みど}さない。「婦人^{おんな}」を「不便^{ふびん}」に思^{おも}い、「旧^{いにし}の孤家^{ひとりや}」に「引返^{ひきかへ}」そうとした、理由^{りゆう}の一つだったろう。ここで寺木定芳⁽⁵⁸⁾が散歩⁽⁵⁸⁾の途中、「すみれ」を摘^とんで喜^{よろこ}ぶ鏡花⁽⁵⁸⁾とすゞの姿を、まるで「十二三⁽⁵⁸⁾の少女⁽⁵⁸⁾と十五六⁽⁵⁸⁾の少年⁽⁵⁸⁾」のようだったと記^しし、そばで見^みていられなかった、「すくなくらず閉口⁽⁵⁸⁾した」と伝^つえていることも、つけ加^くえておこう。

十六

にもかかわらず、「閻王^{えんわう}の使^{つか}」か、または「黄泉^{よみ}の国^{くに}の入口^{いりぐち}を守る」⁽⁵⁸⁾「泉守道者^{いづもりだうしや}」のような親^{おや}仁^には、僧^{そう}の「修^{しゆ}行^{ぎやう}」を忘^{わす}れた怠^{たい}け^け心^{しん}を見逃^{みど}さない。僧^{そう}は私^{わたし}（作者^{そしや}）に次のように云^いっている。

・今更^{いま}行^{ぎやう}脚^{きゃく}もつまらない。紫^{むらさ}の袈裟^{がさ}をかけて、七堂伽藍^{しちだうがらん}に住^すんだところで何程^{なんぢやう}のこともあるまい

・昨夜^{ゆうべ}も白痴^{ばか}を寐^ねかしつけると、婦人^{おんな}が又^{また}炉^ろのある処^{ところ}へやつて來^きて、世^よの中^{なか}へ苦勞^{くろう}をしに出^いようより、夏^{なつ}は涼^{すず}しく、冬^{ふゆ}は暖^{ぬく}い、この流^{なが}に一所^{いこ}に私^{わたし}の傍^{そば}においでなさいというてくれるし、（中略^{ちゆうりやく}）自^{みづか}分に魔^まが魅^さしたようじやけれども

・坊主^{ぼくしゅ}で果^はてするよりは余程^{よほど}の増^ふじや

などと。

ここで右の文の「炬」に注目してみよう。勿論この「婦人」は、「米磨桶を引抱えて」「崖の水」まで行っている。そして僧には「なかなかの御手料理」を振舞い、「飯のつけようも効々しい女房ぶり」だった。「炬にくべた柴がひらひらと炎先を立て」、「行燈の火も幽に幻のように見えた」のなら、「婦人」が僧と話す為、「炬のある処へやって来」たとして、何の不思議もない。だが、この「婦人」が「石の上に立」った時の「素足」も、「何時の間にか衣服を脱いで全身」「練絹のように露にしていた」「姿」も、「雪のような」は、その体の色なのか、体全体なのか、曖昧でよくわからない。「婦人の身体」が「ひとと附ついて」、僧が夢うつつのように、「結構な薫する暖い花の中へ柔かに包まれ」るように、思つたとしても。

というのも『化鳥』の中で、猿を「からかつて」「川へ」落ちて、「水をのん」で「もう駄目だ」と思った「トタンに」と、幼い「私」は、次のように云っているからである。

燐と糸のような真赤な光線がさして、一幅あかるくなつたなかにこの身体が包まれたので、ほつといきをつくつと、山の端が遠く見えて、私のからだは地を放れて、その頂より上の処に冷いものに抱えられていたやうで、大きなうつくしい目が、濡髪をかぶつて私の頬ん処へくつついたから、ただ縋り着いてじつとして眼を眠つた覚がある。夢ではない。

やつぱり片袖なかつたもの。そして川へ落こちて溺れそうだったのを救われたんだって、母様のお膝に抱かれていて、その晩聞いたんだもの。

だから夢ではない。

などと。幼い「私」を「助けてくれた」のは勿論、謡曲『海士』の母親のように、

我が子ゆゑに捨てん命。露ほども惜しからじ

と、無我夢中で川に飛び込んだ「母様」に違いない。助けずにはおかなく、という切羽詰つた熱い思いが、「どぶんどぶんと沈んで行く」私には、「燐と糸のような真赤な光線」に見えたのだろう。「父様」が亡くなつて、人にだまされ「踏まれたり、蹴られたり」……「苛められ」「責まれて」、「朝から晩まで泣通しで」、

・五年も八年も経たなければ、ほんとうに分ることではない

異界の中の母なるものへの憧れ

・人間も、鳥獣も草木も、昆虫類も、皆形こそ変つていてもおんなじほどのものだ(『八犬伝』の伏姫に通じる。又「物類相感」にも)。「人が獣」だ、と思つている「清い眼」の「氣高」く「美しい」「母様」には、『歌行燈』のお三重にも増して、「人の玩弄物」にはなるまいと、ひどい折檻にあり、水の中に沈められても「子」を思い、「鳥」のように飛び立つて帰ることがあったのかもしれない。そして『由縁の女』(大8・1)に、母・すゞの埋葬されている卯辰山の天満宮のある中腹が(そこには小兒たちが、「孤家の黒塚」のように思つて逃げまどつた「茶屋」が「立腐れに残つた小屋」もある)。

紫の医王山が見え、遙に聳えて雪の白山が眺められようと言う処

(出達。故郷の山二)

(59) なら、「溺れて沈んでゆく」水の中で、夢現のように「遠く」に「見え」た「山の端」は、「清」く「うつくしい」「雪の白山」、そして「私」のからだ「が」「地を放れて、その頂より上の処に冷いものに抱えられていたよ」うに思つた、その時の(というより「母様」に後で聞いた)翼の生えたうつくしい姉さん

は、迦陵頻伽のように空に舞つて、いつも「私」を守つてくれていると信じている母・すゞの化身、白山の女神・白山比咩だったので、はなかるうか。『卵塔場の天女』(昭2・4)十一に、

白山は、藍色の雲間に、雪身の竜の玉の翼を放つて翔けた。悪く触れんとするものは、その羽毛が一枚ずつ白銀の征矢になつて飛ぼう。

とあるのを見れば、それはいかにも白山比咩、九頭竜の化身、「翼の生えた」「雪身の竜」だつたろう。

『高野聖』の僧は、「崖の水」で「蛭の垢」を流して帰る時、「木の丸太」を渡っている。その「草のなかに横倒れになつ」た「松の木は蜷に似て」、「月のあかりに歴然と」「長虫」のように見え、「足」の「竦む」のを、「十一面観音」にも「菊理媛(白山比咩に同じ)」にも重なる「婦人」は、

下を見てはなりません。丁度ちゆうとで余程谷が深いのでございますから、目が廻うと思つてござんす

などと、「氣遣」つてくれただけでない。まるで母親か姉のように、「足駄」を「草履」に代えさせ、「意気地」のない僧を励まし、僧は又、

畏敬の念が生じて善か悪か、

などと思ひながらも、僧の「足駄」に「穿き」かえた「婦人」に「従つて」、思ひもよらず「ひよいと」、「孤家の背戸の端へ出」るのである（この「背戸」は、「神の村」・「石徹白、白山中居神社の「冥界の黄泉坂との境界を示すと云われる「千引岩」が、ヒントになっていたのではなからうか）。そこには「閻魔」にも「泉津守道」にも重なる、親仁がいた。

「死者の霊のあつまる」所と云われる白山は、修験の山だが、五来重は、「修験道儀礼」では、「橋」は大きな役割を果し、娑婆とあの世をへだてながら、これを往来することによって擬死再生の儀礼を行った。

と述べている。そして「橋をわたることによって人間は神に変身するのであ」って、「能の橋がかりも夢幻能では亡霊にな」るのも、橋の向うが「あの世」という觀念があつたからである。

と述べている。そして更に、

もし不浄不貞なことがあれば橋から落ちて死ぬといわれている。

と記し、その上「白山から出たものであろう」と推定される「立山の布橋（白山に因み、橋に白い布を敷く）大灌頂」では、常に信心の誠心うすく邪心ある者は、この布橋が「篠蟹（蜘蛛）の糸より細く見え」て渡ることができず、三途の川に落ちて、金銀の大蛇に巻かれて死ぬといわれた。従つて渡り終えたことは未来永劫、不退の彼岸往生の仏証を得たものとして、其の喜びは筆舌に尽くし難い大変なもので、感涙に咽び泣いたと伝えられる。

などと云っている。

「婦人」と共に「孤家」に帰つて来た僧を見て、親仁が、

やあ、（中略）御坊様旧の体で帰らっしゃたの

と「声を懸けた」のは、五来云うように、「背戸」の後ろの「橋の向う」が「あの世」で、「浄土であると同時に地獄」にもなることを、踏まえてのことだったろう。十一、面観音にも菊理媛（もとは伊邪那美だった）にも重なり、加賀一の宮白山比咩神社は勿論、長滝白山神社の中央本殿にも祀られている「伊弉諾尊・伊弉冉尊二神」の間に生まれた子、「姪のように手足の萎（な）えた」「姪子」同然の、

「腰」の「抜けた」「不具」の「子供」、「これから蛙になろうとするような少年」(蛙は蛭と関係ある語か、と云われる)を夫にして、ヨミガエリの水に恵まれたこの「婦人」は、「土橋」を渡って、「孤家」にやって来た者の心の浄・不浄によって、即ちその「心の照応する所」によって、「変幻極りな」く(おぼけずきのいわれ少々と処女作)明40・3)、「神」にもなれば「魔」にもなる。心のねじけた好色な「富山の反魂丹売」は、「橋(松の木丸太)の向う」の「谷川の水」で「馬」にされ、親仁の手で「鯉」の「銭になって」、「婦女の大好物」の「晩飯の菜」になっている。嫌な奴でも「見殺」にしては、

念仏にも済まぬ

と思つて危険な道を選んだ「志」の「堅固」な僧は、同じ「水を振舞われ」「嬢様の手が触つて」も、極楽のように「佳い薫」のする「花の中へ」「包まれる」思いをして、「長虫」のように見える「橋」の上でも大切にされ、「旧の体」で「孤家」に帰っている。

「松」は能舞台の正面の鏡板に描かれた「老松」や、橋掛りの松にかかわるのだろうか。「木の丸太」は「二河白道」の「橋」のようだが、五来は、富山県立図書館本の『立山曼荼羅』には、

橋の下、の河の中に大卒塔婆一本と六道塔婆四本が立てられていて、産死者のための供養がおこなわれていたことがわかる。

と述べている。⁽⁴⁶⁾鏡花は、母・すゞは「産褥熱」で亡くなったと信じていた。⁽³⁶⁾そして又、「反魂丹売」の言葉の使用は、心(魂)には仏性が宿るとの思いからだつたろうか。

「魔が魅したよう」に、「婦人」に「念が懸つて煩惱」の「起きた」旅の僧は、その怠け心を親仁に見すかされ、

妄念は起こさず、早く此処を退かつしやい、助けられたが不思議な位、嬢様別してお情じやわ、生命冥加な、お若いの、きつと修行をさつしやりませ

と一喝されるや、「魂は身に戻り、親仁を「拝むと斉しく」、「一散に」山を「駆け下り」るのである。そしてこの「若い」僧が、白山と同じ修験の道を志す高野山の聖で、「宗門名譽の説教師」、「六明寺の宗朝という大和尚」になつてゆくこと、改めて云うまでもない。そして又、優しく美しく、「犯すべからざる者」にも見える「孤家」の「婦人」が、亡き母・すゞに重なることも。

この作品は、「夜」の「更けるまで」、その僧の「談」を聞いた筆者の「私」が、僧との別れを、

図13



浪中得^上龍門去
不^レ歎^レ江河歲月^一遷

里見治部大輔義實

碓子余春
忍光八
瀬波江乃
始垂母
幸之河余
加久余
世波

著作堂

金碗八郎孝吉

図14

異界の中の母なるものへの憧れ

翌朝袂を分つて、雪中山越にかかるのを、名残惜しく見送ると、ちらちらと雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、あたかも雲を駕して行くように見えたのである。

と記して終るが、この文の傍点部分は、『八犬伝』筆輯口絵第一図(図13)・第二図(図14)⁽¹³⁾を下敷きにしたものだったろう。

この第一図(図13)は、金碗八郎孝吉の持つ里見家・家紋の入った旗で、第二図(図14)につながり、その旗の先には何回も脱皮をくり返して成長する蟹⁽⁴⁴⁾がいる。孝吉は伏姫の許婚・大輔孝徳の父親、年齢はかなり高いが、金太郎同様鯉に乗るのも、同じように伏姫の父親・里見義実。大輔は伏姫の死後、大法師と名を替え(後に「聖」と呼ばれる)、伏姫の身から舞い上がり、飛び散った霊玉(八犬士)を求めて旅に出、里見家再興の要になっている。従って義実と、大法師とは一心同体だろう。そしてその義実が景連らにだまされ、鯉を求めて、「白箸河」で乞食姿の孝吉に出会わなければ、義実は「君子の一言」を齎し、悪婦玉梓を討ち、伏姫神に守られて、龍門の鯉、同様の里見家再興に至る『八犬伝』そのものが成立しなかったろう。鯉に深くかわる乞食姿の金碗八郎孝吉は、鏡花の中で、白山山中と思われる「谷川」のほとりで、「孤家」の「婦人」^(おんな)の為に、「売薬」の馬を、「鯉」に変えて持ち帰り、お若いのに、きつと修行さっしやりませ

と一喝する「親仁」に、深くつながっていたと思われる。この口絵第一

図(67頁図13)・第二図(67頁図14)は、八房との「物類相感」による妊娠を、神童(親仁)につながっていた⁽⁶²⁾が伏姫に知らせる場面の図(31頁図4)とともに、『八犬伝』にとって最も重要な場面だったに違いない。

十七

しかもその孝吉に重なる親仁が、僧に向って厳しく投げかけた「修行」という言葉、それは世阿弥に代表される能の「修練」や「稽古」にもつながるが、師の紅葉が、食べるだけは何とかしてやりたいと、弟子たちに云い続けた言葉だったことを、ここで見逃す訳にはいかないだろう。鏡花が「観音力の絶大なる加護」と信じ、「絶対の信用を捧」げる(「おぼけずきのいわれ少々と処女作」)その紅葉に反対され、厳しく叱責されながら、亡き母に重なる桃太郎・すゑを諦めなかったのも、師の紅葉が叱咤激励して、言い続けたこの言葉を、一筋の光明にして励み、そのすゑを生涯の変わらぬ妻にただでなく、鏡花自らをも押しも押されもせぬ作家していったのだと思われる。そしてこの作品自体が、その紛れもない証しなのだということも。のみならずその背後には、母・すゑに重なる一葉がいたのだということも。

「年齢的には」「一つ」しか変わらず、「作家としての出発も、ほぼ同期」⁽¹²⁾だった一葉を、鏡花が、「好敵手」として「強く意識」⁽²⁶⁾してしたこと、改めていうまでもない。だが、それだけではないだろう。というのも「孤家」^(ひとつや)の「婦人」^(おんな)が、「十三夜の月」の中にいるからだ。この「月」は、一葉の小説『十三夜』(明28・12)に、無縁ではないだろう。この作品は、「月もさやかな」十三夜の、上野周辺を舞台に展開する。

「七年も耐えてきた」夫に「我慢」ができず、「離縁状」をもらってもらうために訪れた実家に、世の中の様々な柵の中で、もはや「居場所」のないことを知ったお関は、「断つても断てぬ子の可憐さ」^(かわゆ)故に、

今宵限り関はなくなつて、魂、一つがあの子の身を守ると思ひますれば(中略)百年も辛棒(修行に通じる)出来さうな事。

と「帰路」に着くのである。そして「淋しい」「上野の森」で、「突然に」^(だしぬけ)下ろされた「辻車」の、身を持ち崩した車夫が、お互に「涙

がこぼれて忘れかねた人」だったことを知り、大切なものを失ったあとの「身の破滅」を思い、「これが夢ならば仕方のない事」と、二人は「十三夜の月が静かに照ら」す中、「淋し」く別れて行く。萩の舎で和歌・和文を学び、明治の紫式部・清少納言と云われた一葉は、美しいがすぐ散る桜と対極にある、夜空を照らす月の意味をよく知っていたのだらう。その小説の中で、「月」は「人生を見つめる神や仏の視線として位置づけられ」、「この作品」は「その典型といえよう」⁶³などと云われるが、この二人に『高野聖』の女と子供と僧を、そして鏡花にとつては、母・すぐと桃太郎・すぐを重ねることができらるだろう。

相馬御風は『樋口一葉論』（明治43・1）の中で、一葉はまぎれもない「東京の人」「東京の女」だったと云っている。そしてその一葉の初期の作品の中の、

優しく、美しくつつましい奥に、どこか女の意地を立て通すと云ったような凛々しい、底力を持った女

は、その「人生観に基いて心の中に」造られた作者の「理想の影」だったと云うが、それは御風が作家達の言葉で紹介する一葉の姿にほぼ重なり、鏡花の母・すぐにも重なってくる。一葉その人が、「東京の相応な家庭に生まれ」、「草双紙や人情本に耽読」して育ち、父親の死後落ちぶれて、天啓顕真術師・久佐賀義孝に、妾にと誘われたこと、そしてわずか二十四歳の若さで亡くなってしまったことも。

一葉や鏡花同様、幼い頃草双紙の中で育ち、「鏡花、一葉を暗誦するほどの小説好き」で、

わたしは、小説が書きたかった

と洩す清方の作品の中でも、『二葉』（昭15）が「取りわけ好き」で、その「文学性から生まれた作品」だろうと推測する芝木好子は、

・見るたびに（中略）母を感じる。

・普遍的な明治の女でもあって、一つの永遠を語っている気がする。

などと云っている。そして又、

針仕事をするありふれた姿を越えて、思索する女の姿勢が顕れている

とも、

静かに坐した女性の眉宇の凜としたさまは、一葉以外の何者でもない。

とも云っているが、それは「上流の子女」達の人力車の並ぶ萩の舎から、大きな風呂敷包を背負って出、「裁縫・洗い張り」で生活しながら、小説を書いた一葉の内面を、見事に言い当てた言葉だろう。この絵は、一葉に「遇ったこと」のない清方が、昭和十二年『薄紅梅』の挿絵を担当した時、鏡花のその作品の中の次の文(十六)、

一葉女子は、いつも小机に衣紋正しく筆を取り、端然として文章を綴った

を「膨らませ」、妹の邦子の姿を重ねて描き、鏡花その人に「気味の悪いほどよく肖っている」と云われたことに「力を得て」、描き上げた⁽⁶⁶⁾と云われている。清方には又、鏡花の「一葉の墓」(明33・10)を見て、「スケッチブックを携えて墓所へ向い」、「香華」の「煙の中に美登利の幻影を見て、描いたと伝えられる『一葉女史の墓』(明35)があり、真如の置いて行った「水仙」を手に、墓によりかかる美登利の姿が、香の煙の中に一際斬新だが、その『たけくらべ』(明28・1・12)の中に描かれる子供たちの中でも、金貸しのおばあさんと暮し、年上の美登利(十四歳)に憧れる親のない正太郎(十三歳)は、『一之巻』(明29・5)以降の鏡花作品に見られる年上の女性に憧れる主人公たちの手本・核になったのではなからうか。「本郷丸山町」という「あしき隣の岡場所」に住んでも、「昂然として」⁽⁶⁷⁾「薄紅梅」十六)まるで「芥溜に水仙」(『歌行燈』十四)のような一葉その人が、明治二十九年五月、郷里・金沢から祖母きてと弟・豊春を迎えて同居した、親のない鏡花にとって、正太郎にとっての美登利のような存在だったとしても不思議ではない。鏡花が、「次手あるよりく」に、「一葉の墓」に行つて「詣づること」(「一葉の墓」)があつたのも、一葉に母・すゝの面影を見て、憧れていた何よりの証拠ではなからうか。

男妾のような生活もし、父・清次に死なれて自殺の誘惑にもかられた鏡花だが、満五歳の幼さで母親を亡くし、漢方医の祖父母のもとで育った、紅葉に出会つて以来、母・すゝに守られるかのように、一葉をはじめ、一葉・鏡花の才能を愛した博文館の大橋乙羽など、恵まれた人に出会つた、幸せな生涯だったように思われる。鏡花自身が、

紅葉先生の書かれるものでも、露伴先生の書かれるものでも、どうかすると、私にも書けないことはないと思つた。しかし一葉の『たけくらべ』は私には絶対に書けないと思つた。あの作を読んだ時には、実際、私は驚きの余り、頭が一時ぼんやりしてゐた

と云つてゐるのなら尚更のこと。そして又、「同郷の親友」吉田賢龍を訪ねて柳田国男に出会ったことも、『高野聖』の成立には欠かせない重要なことだったろう。

というのも、宮本常一は調査の為石徹白いとしろに入つて、

ここは明治に「美濃越前往復」によれば明治四十四年、柳田先生が行かれた所で、

などと記すが、吉田賢龍の「大学寄宿舎の部屋」で出会つて以来、「暇さえあれば小石川の家へ行ったりし」、「それ以来、学校を出てから後も、ずっと交際して来た」（『故郷七十年』文学の思い出）「互いを許し合う仲だった」⁽⁷⁰⁾のなら、『高野聖』を書く前から、鏡花は準備段階の柳田国男に聞いて、「石器時代の遺跡地として考古学者」も訪れた石徹白を中心にする、「飛驒・木曾山地」について既に知っていたのではなからうか。と云うのも宮本が、

・（出作り）小屋の前に小さい流れがあり、そのほとりにうすもいろいろの美しい花が咲いている。きれいな水にやしなわれて咲いた花だけに清潔なりりしいものを感じる。

・「自分の故郷は深い谷川のほとりにあるのだが、そこには乙姫の淵というのがあって、その淵で乙姫が裸になつて水をあびていることがあり、（中略）月の夜に緑色が深かった。淵の上に美しい女がたつて、自分の方を見てニツコリ笑つた。ハツと思つて目をそらしてもう一度見直すともう見えなかった。子供の時のことであつた」とまじめに話す。

などと述べていることは、『高野聖』の「孤家」^{ひとや}の女を描く上での素材として捨てがたく魅力的だからである。「麻を刈る」（大15・9・10）に記す広島師範の穂科信良の体験談、——夏の「一人旅で、山神を驚かし、蛇を踏んで」、「名代の天生峠を越し」、「あ、降つたる雪かなと山蛭」を「払つて、美人の孤家」に宿り、「首尾よく岐阜へ超した」などと記す話を、より神秘的に膨らます為にも。しかもこの文に、「売薬」や「人力車」（この字は紅葉先生の創意であるとも述べている）とともに、一葉について「大音寺前の姉さん」、「丸山福山町の「一葉女史」などと、二度も記していることも、見のがす訳にはいかないだろう。のみならず宮本が、「中居神社の社人の村」だった石徹白には、かつて「桑蚕祭」があつたと述べ、

オシラ様は蚕の神だとも云われており、所によつては蚕をオシラとよんでいる

と記していることも。というのも、「人間、何よりも食う事が大切である」と、最初の章の始めの部分に記す『山海評判記』(昭4・11)には、既に指摘されているように、柳田国男がモデルかと思われる邦村柳郷博士の、オシラ神信仰についての解説が、「白山の姫神」の話のすすむ中で記されているからである。

すゝとの同棲にも力を貸した吉田賢龍が、柳田国男と共に、『湯島詣』(明32・11)の冒頭部分、紅茶会のメンバーのモデルであること、云うまでもない。

《注》

- (1) 村松定孝『定本 泉鏡花研究』(有精堂)
 - (2) 吉田昌志『泉鏡花素描』(和泉書店)
 - (3) 松原秀江「異界の中の母なるものへの憧れ(中)―鏡花にとつての辰口鉾泉の伯母・ちよの娘・ふみ―」(大手前大学論集第17号)
 - (4) 笠原伸夫「高野聖」(解釈と鑑賞 昭和四十九年十二月)
 - (5) 宝暦八(一七五八)年『通俗西遊記』と訳され出版されて、文化三(一八〇六)年『画本西遊全伝』が出ると、「この絵本は何度も版を重ね、昭和になってもまだ出版されているというほどのロングセラー」だった(偕成社『西遊記』渡辺仙州「三蔵と旅の仲間たち」)。馬琴にも『西遊記』の翻案『金毘羅船利生譚』(文政7)があるが、「明治以来、『西遊記』と名のつくものは、『ゆうに三百種に達し』、原本は「おとなのために書かれたもの」だが、日本でも「少年に愛好」され、中国では、「青少年の愛読書の随一」だった(岩波少年文庫「まえがき」)。
 - 「泉鏡花蔵書目録」(日本文学研究資料新集12『泉鏡花・美と幻想』有精堂)にも、「西遊記(木)十冊」「正統西遊記(木)一冊」とある。(木)は木版本の意。
 - (6) 信多純一『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』(岩波書店)
 - (7) 『江戸文学問わず語り』(講談社)
- 『八犬伝』を読み耽ったという「明治十年代」の「雪深い山形あたりの古い家」の母方の祖母との関連で云えば、尾張鳴海・千代倉家の「明治四年、此汐日記」の中の「氏神祭」の「練り物(作り物)」(森川昭氏御教示)の中にも、『八犬伝』を見ることができる。
- 八月廿七日 晴 (氏神御祭礼、今明日。略)
- 八月廿九日 晴 一、今晚如先例神明宮御祭礼。組々より左之通。
- 一、豊年祭の学び 平部組(平部町)

一、咄し物真似の学び 中嶋町

一、雀おどりのまなび 相組 (相原町)

一、すみだ川 本組 (本町)

一、里見八けん伝 根組 (根古屋町)

一、雪見花芸者 作組 (作町)

一、小野道風の学び 上中

一、十日恵比須学び 上町

メ 相川、雷、本川、作川、右挑灯斗り。

右之通、何れも見事ニ出来、近村々より見物夥數人出有之。久々ニ大群集ナリ。

森川昭「千代倉家日記抄 五四―明治三年―明治四二年―」(夷参(いさま) 一八号) など。まさに馬琴の代表作『八犬伝』は、「曾ては日本中津々浦々にまで読み漁られた」「大伝綺」小説だったのだろう。

(8) 『新版能・狂言事典』(平凡社) など。

(9) 吉田精一「紅葉と魯庵」(現代日本文学大系第3巻月報40 筑摩書房)

(10) 加藤康子「江戸時代のベストセラ―『南総里見八犬伝』―児童文学への影響も含めて―」(梅花女子大学文学部紀要37 児童文学編20)

(11) 篠田一士は、「紅葉・露伴・鏡花―近代文学史のもう一つの基軸」(国文学49年3月号)の中で、

紅葉というひとは一種の「文体の天才」ですから、西鶴にかぎらず、「源氏物語」でも、それから化政の読本のたぐいでもうまく自分流に文章をマスターしていますけど、それは、文章の彼は天才なんです、

などと云っている。篠田が「馬琴」と云わず、「化政の読本のたぐい」と云うのは、円地文子や、「自分の生れ故郷のような江戸後期の文学」「その代表」である「馬琴の八犬伝や弓張月」を、「人眼を忍ぶ感じで」「読み耽っていた」にもかかわらず、「言わば馬琴は私の恥部のようなもの」だったと記しているように、「小説神髓」以後の近代の文学に携る者の一つの態度だったろうか。前田愛は『近代読者の成立』(有精堂)の中で、

逍遙は明治十年代後半の文学状況を「小説全盛の未曾有の時代」と規定したが、それは同時代の小説に、鰯刻による戯作の復活を加えた「小説全盛」なのであった。

と云い、「小説神髓」が標榜した馬琴批判の背景には、「他を引き離した『八犬伝』を始めとする「化政度以降の読本・人情本・滑稽本」が主流の「鰯刻ブーム」に支えられた馬琴の復活があった」と述べている。氏の示す「戯作小説鰯刻表(明治15―明治18)」には、「里見八犬伝」をトップに、「膝栗毛」「倭文庫」「絵本三国志」「絵本西遊記」が、上位を占めている。

(12) 『鏡花全集』(岩波書店) 別巻作品解題

(13) この図は濱田啓介校訂新潮古典集成別巻『南総里見八犬伝』(国立国会図書館蔵、瀧澤家旧蔵本) によっている。

(14) 『八犬伝』の世界」(文学1969・12)

異界の中の母なるものへの憧れ

- (15) 監修・著 服部仁 芸艸堂 図2・図6 服部仁氏蔵
- (16) 著作権 根本章雄氏。泉鏡花記念館写真提供。
- (17) 『国史大辞典』(吉川弘文館)
- (18) 三宅正太郎「鑄木清方の『高野聖』」(カラーグラフィック・学研版 明治の古典 月報3) など。
- (19) 宝生和英(宝生流二十世宗家)は、『宝生能楽堂』の中で、
明治以降の宝生流の能舞台の歴史は、明治十九年(一八八六)に神田猿楽町に建てられた松本金太郎の舞台から始まり、当初は十畳位の板の間を拵えただけの粗末なものだったが、明治二十六年には舞台の改造、同三十一年には新しい舞台が建築され、猿楽町舞台として使用される。
- と記している(小林保治・表きよし編『カラー百科 見る・知る・読む 能舞台の世界』勉誠出版)。
- (20) 西野春雄「河鍋曉斎の能画・狂言画」(『特別展 河鍋曉斎の能・狂言画』河鍋曉斎記念美術館 三井文庫・三井記念美術館 金沢能楽美術館)
- (21) 小林保治「はじめに」(『カラー百科 見る・知る・読む 能舞台の世界』勉誠出版)
- (22) 監修西野春雄・解説見市泰男『能面の世界』(平凡社)
- (23) 『世界山岳百科事典』(山と溪谷社) など。
- (24) 『日本百名山』(新潮文庫)
- (25) 曾我孝司『白山信仰と能面』(雄山閣)
- (26) 『鏡花―泉鏡花記念館―』(泉鏡花記念館・(公財) 金沢文化振興財団)
- (27) 小林輝治「『高野聖』と馬妖譚」(カラーグラフィック・学研版 明治の古典 月報3)
- (28) 『角川日本地名大辞典』17石川県など。
- (29) 第28回慶應義塾図書館貴重書展示会『鏡花の書斎「幻想」の生まれる場所』(慶應義塾図書館)。蔵書はこの中の「泉鏡花旧蔵草双紙目録」
によっている。
- (30) 種村季弘「芸の討入り」(筑摩書房『泉鏡花集成』11解説)
- (31) 新潮日本文学アルバム22『泉鏡花』
- (32) 松竹蔵。泉鏡花記念館写真提供。
- (33) 「羽つき・手から・鼓の緒」(鏡花生誕140年記念特別展「泉名月氏旧蔵泉鏡花遺品展」泉鏡花記念館)
- (34) 三井文庫 三井記念美術館編(河鍋曉斎記念美術館 三井文庫・三井記念美術館 金沢能楽美術館) 図10は東京国立博物館蔵、図12は太田記念美術館蔵。
- (35) 『没後130年河鍋曉斎』(兵庫県立美術館)
- (36) 松原秀江「異界の中の母なるものへの憧れ―鏡花にとつての桃太郎・すゞ―(上)」(大手前大学論集第16号)

(37) 鳥居フミ子『金太郎の謎』(みやび出版)。但し図11は別冊太陽愛蔵版『歌麿』(平凡社)によっている。リッカー美術館蔵。

(38) 『日本伝奇伝説大事典』(角川書店)

(39) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店)

(40) 日本古典文学大系50『近松浄瑠璃集下』解説(岩波書店)

(41) 『全国昔話資料集成4 白山麓昔話集 石川』(岩崎美術社)

(42) 黒川伊保子『母と子のための脳科学』(ポプラ社)

(43) 前田速夫『白の民俗学へ 白山信仰の謎を追って』(河出書房新社)

(44) 『日本国語大辞典』(小学館)

(45) 『母子』(別冊太陽愛蔵版『歌麿』 平凡社)

(46) 五来重『布橋大灌頂と白山行事』(山岳宗教史研究叢書10『白山・立山と北陸修験道』名著出版)

(47) 藤本四八『白山 信仰と芸能』(朝日新聞社)

(48) 曾我孝司『ふるさとの能面と芸能を訪ねて』(雄山閣)

(49) 西海賢二・時枝務・久野俊彦編『日本の霊山読み解き事典』(柏書房)

(50) 新潮文庫『歌行燈・高野聖』解説

(51) 『能楽大事典』(筑摩書房)

(52) 『新編泉鏡花集』(岩波書店) 第七巻解説など。

(53) 新保千代子は『歌行燈』のモデルを追って(『鏡花研究第六号』)の中で、次のように云っている。

明治二十五年(上京して転々とした挙句の果てに、紅葉宅に訪れ、入門を許され玄関番として住み込んだのが、明治二十四年)七月六日、ふとした事から鏡花は出先で伯父金太郎の消息を耳にした。それまでは維新の大変後、静岡に逼塞してその日の糧にも困っている。とばかり思っていた伯父が、疾く神田猿樂町に舞台をかまえているとの事に、その足で鏡花は「宙を飛んで駆けつけた」という。なぜもっと早く訪ねて来なかった。と叱るのも伯父ならこそ、この後は「自分のウチと思ふてアマエに來い」との金太郎の言葉にうなずく鏡花は涙ぼろぼろ。この日の模様を鏡花はさっそく故郷の父に宛てて葉書で知らせている。

(54) 「高野聖」の神話的構想力(『文学1987・3』)

(55) 『笈摺草紙』(明31・4)にも、「山下の寮」(近くに浅野川が流れている)に住み、「清い、凜とした瞳が動いて、いかにも「錦絵」を見えるような「気高い、品の備った」女・紫のその「都風俗」の中に、名月の文に記される「木履穿」や「追羽子」打とともに、「女は髪形」と云われたその「髪」のことで、紫の母親のこととして、次のように記されている。

地方の手が違ひ、格好が悪いとして、第一母親が合点せず、人橋かけて捜しあてた、鳶の者の女房で、江戸から遁げて来たのがあって、内職にはしませぬ、頼まるれば遊びがでらといふに頼むでは、紫の髪を結はしたといふ。

異界の中の母なるものへの憧れ

などと。紫はすがモデル。

- (56) 八房は畜生の分際で「高慢も高慢」、伏姫を求めてやまず、富山の奥へ連れ去って、義実が「女壻」に決めていた金碗大輔に撃たれ(退治され)てしまうが、この大輔の行為を、馬琴は、

弱冠の一トすぢご、ろに

と記している。又「辱められた」「口惜し」さで、「憤死して死した」宗山は、

七代まで流儀に祟る

と、「手探りでにじり書した遺書」を残すが、『八犬伝』の玉梓も一度は赦すと云った義実を殺され、

兄孫まで、畜生道に導きて、この世からなる煩惱の犬となさん

と狸に生れ変わり、八房を育てて乗り移っている。

- (57) 北村透谷は「処女の純潔を論ず(富山洞伏姫の一例の観察)」の中で、伏姫の「処女の純潔」を「至宝」とたたえ、

第二輯の第一巻は全篇の大発端にして、其実は「八犬伝」一部の脳髓なり、伏姫の中に因果あり、伏姫の中に業報あり、伏姫の中に八

犬伝あるなり、

と述べている。

- (58) 『人・泉鏡花』(近代作家研究叢書18 日本図書センター)。この部分は中戸川吉二の随筆からの引用ではある。

- (59) 「加賀側の古文書によれば、泰澄は「加賀越中の国境の医王山で神のお告げをうけ、白山開山をした」ことになっている(藤本四八『白山

信仰と芸能』朝日新聞社)。

- (60) 「十一面観音」について、『仏教大辞典』(仏教大辞典発行所)では、

其十一面は前に当る三面は寂靜相を作し、右辺の三角は威怒相、左辺の三面は利牙出現の相、後の一面は笑怒容、最上の一面は如来

相を作し、頭冠の中に各化仏あり

などと記し、『仏教美術事典』(東京書籍)では、

通常、經典に従って、前三面を菩薩面、左三面を瞋怒面、右三面を狗牙上出面、後一面を大笑面、頂上面を仏面とする

などと記している。

- (61) 「飯の橋」の意か。既に見たように、僧が踏み込んだ「恐ろしい魔所」(死者の赴く山、死霊の集まる山としての白山)も、三層の構造になっている。先ず「神代の古から」長虫や山蛭の屯する大森林としての白山。次に土橋を渡って、僧がたどり着いた山中の「孤家」。この山奥の「一軒家」に住んで、「米磨桶」を「抱え」、「お米」を「炊いて」、僧の「飢え」を満たす女には、人々が五穀豊饒を祈る白山比咩の一面があるだろう。蛇にも等しいこの女が、姪のような「白痴」と「臥せ」る「納戸」は、夫婦の寝室であるとともに、「疲れ果てた稲魂をもう一度甦らせる」「産屋」でもある(石塚尊俊「納戸神に始まって」山陰民俗28)。だがそこは、「魍魎魍魎」の跋扈する「畜生道の地獄絵」さながらの一瞬の飯の世にも等しい所だった。そして、「長虫」のように見える松の木丸太の橋の向うで、生と死のどちらかが決まる。

- (62) 新日本古典文学大系明治編24『樋口一葉集』(岩波書店)「十三夜」梗概
- (63) 『全集 樋口一葉② 小説編二(復刻版)』(小学館)「十三夜」題名
- (64) 「竊木清方 内面の美を求めて」(日本名画10『竊木清方』中央公論社)
- (65) 現代日本文学大系5『樋口一葉・泉鏡花』(筑摩書房) 樋口一葉年譜
- (66) 「特集 清方と一葉」(『竊木清方 清く潔くうるはしく』東京美術)
- (67) 『日本近代文学大事典』(講談社)
- (68) 伊狩章「鏡花と一葉」(鏡花研究第五号)
- (69) 『越前石徹白民俗誌・その他』(宮木常一著作集36 未来社)
- (70) 吉田昌志『鏡花随筆集』(岩波書店) 解説

(附記)

本稿を成すに当り、明石市立図書館、石川近代文学館、石川県立図書館、泉鏡花記念館、大阪府立中央図書館・中之島図書館、金沢能楽美術館、神戸市立中央図書館・三宮図書館・新長田図書館、国立国会図書館、島根県立図書館、西宮市立図書館、兵庫県立図書館の学芸員・司書の方々にお世話になりました。心より厚くお礼申し上げます。

本稿は大手前大学総合文化学部・兵庫県立大学環境人間学部での授業、及び奈良女子大学佐保会大阪支部での講演が、切っ掛けになりました。熱心に聴いて下さった皆様に、深く感謝致します。

末筆ながら、本稿を昨年十月に亡くなられた、恩師・信多純一先生に捧げます。入学以来五十年以上もの長い間、お世話になりました。本稿も先生の『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』に導かれて出来ました。学恩ははかり知れません。心より深くお礼申し上げます。